

42044

教科書文庫

4
810
41-1933
20000 39192

1933

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

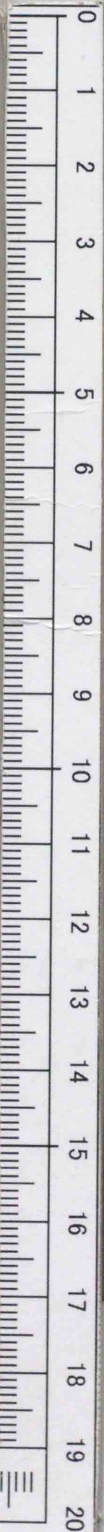
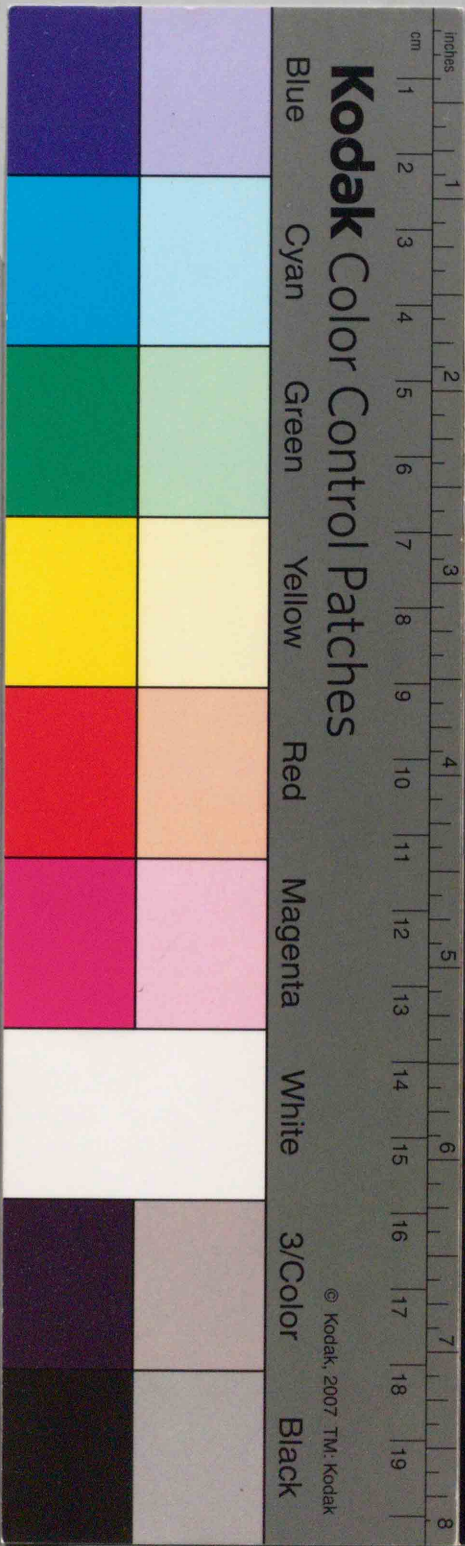


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



3759
I91
資料室



375.7
Tg 1

資料室

用科文漢語國校學中 日一十二月二年八和昭
用科語國校學業實 日一月九年八和昭

濟定檢省部文



法政大學國語讀本

文學部 第三編



法政大學國語部

不動明王 (狩野芳崖作)



(芳崖とフエノロサ 参照)

不動明王圖

同じく狩野勝川の門から出て、明治新興畫壇の二大勢力となつたのは、狩野芳崖と橋本雅邦とであつた。雅邦は温厚で悠々自適の生涯を送つたが、芳崖は血性的情熱家で、自ら早く燃え盡くした觀がある。この不動明王圖は芳崖が熱烈な信仰の一端を披瀝したもので、形よりも精神を主とし、古畫に依據するよりも、寧ろ自ら解釋し得た大聖不動尊を描かうとしたもので、人をして意志の權化、折伏の本尊明王の前に拜跪せしむる趣がある。紙本。東京美術學校の所藏。

純正國語讀本卷四

目次

- 一 明治神宮……………一
- 二 二月堂と三月堂……………島村抱月……………七
- 三 鰯引……………正岡子規……………二
- 四 膽力……………嘉納治五郎……………三
- 五 ものの出端……………杉村楚人冠……………三〇
- 六 狩野芳崖とフェノロサ……………三七
- 七 潛水艦上の或る日……………穗積律之助(講演)……………三
- 八 潛水艦上の或る日……………その二……………穗積律之助(講演)……………四
- 九 旅……………現代歌人……………六

一〇 五虹の錦帶橋…………… 壺

一一 夜叉王…………… 岡本綺堂…………… 壺

一二 天然の恵…………… 千家元麿…………… 壺

一三 大同江…………… 高濱虚子…………… 壺

一四 清正公と紀文大盡…………… 幸田露伴…………… 壺

一五 悔いて食はず…………… (二宮翁夜話)…………… 壺

一六 熊の話…………… 相馬御風…………… 壺

一七 北露の冬の美觀…………… 大庭柯公(據)…………… 壺

一八 仙崖和尚…………… ……………… 壺

一九 清福…………… 貝原益軒…………… 壺

二〇 名君…………… 菊池寛…………… 壺

二一 大川の水…………… 芥川龍之介…………… 壺

二二 渡歐の門出…………… 島村抱月…………… 壺

二三 歸朝…………… 島崎藤村…………… 壺

二四 鬼作左の嬉し泣き…………… 新井白石…………… 壺

二五 楠公と諸葛武侯…………… その一…………… 大町桂月…………… 壺

二六 楠公と諸葛武侯…………… その二…………… 大町桂月…………… 壺

目次終



純正國語讀本 卷四

一 明治神宮

威靈を加へる。

或は楓樺の並木により、或は蒲葵の叢林によりて、廣前を清め神苑を飾る。

我が國の神社佛閣、樹木によりてその威靈を加へざるものなし。或は杉により、或は檜により、或は樟樹により、或は竹栢マダヒにより、或は楓樺つばきの並木により、或は蒲葵アザミの叢林によりて、廣前を清め、神苑を飾るなど、舉げて數ふべからず。中には樹木其の物に神靈を認めて社殿を設けざるさへあり。従ひて樹木の神社佛閣を莊嚴する趣致様式種々あれども、

國産の樹木の大多数を網羅せり。

その様式の特種なる、明治神宮の如きは稀なるべし。殊に其の趣致の複雑にして深き意義を含めること、明治神宮の如きは極めて稀なるべし。

十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。

明治神宮の神苑は、國産の樹木の大多数を網羅せり。而して其の樹木の多くは遠近の臣民の獻納にかゝるものにして、中には赤子自ら遠く負ひ來りて植ゑつけたるもの少なからず。かく種類の多く、精神的意義の深き點より見て、明治神宮の神苑は萬國に比類なきものなるが、殊に珍しく貴きは、神門の内、拜殿を正面にして、廻廊に圍まれたる大廣前に、唯だ十數株の喬松の亭々として聳え立てる趣なり。吾等は此の計畫が、如何なる意義により、何人に考案せられ

我が特有の國土美を發揮したる。

たるかを知らねど、それが我が特有の國土美を發揮したる點より見、大帝を偲び奉る赤子の心を現はしたる點より見て、恰好無上の選擇なることを歡ばずんばあらず。

見よ、地上は一面の白砂に清められて、其の間より、唯だ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而して其の長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかさされ

吾等をして神宮に詣でしめよ。まづ清められたる參道を過ぎ、長き廣き道の左右に、寒、温、熱の三帯にわたる無數の樹木の、疎密さまざまに植ゑ並べられたるを眺めつゝ、幾曲折の後、恭しく神門を入れれば、見よ、地上は一面の白砂に清められて、其の間より、唯だ赤き太き長き松の十數幹の抜け出でたるにあらずや。而して其の長き幹の頂には、翠の圓蓋美しくかさされて、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。それ松は、我が國土美の最も貴重有力なる要素なり。之れ

て、神殿の檜皮を護り奉れるにあらずや。

凡そ風景の美に鳴る所、いづれか此の名木の韻致に負ふところなからん。

を三景に見るに、松島は名の如く松の島にして、八百八島殆んど悉く松をかざせり。天之橋立は二十八町四間の長く延びたる沙嘴、切れ目なく其の緑色に飾られたり。嚴嶋は朱欄海水に映れる社殿のほとりを始めとして、周囲の海岸より彌山の頂上まで、到る所に、此の常磐木を主役として、類ひなき风光の美を發揮せり。その他、瀬戸内海に羅布せる花彩列島より、須磨、明石、舞子、三保、虹、千代、もろくの松原、及び無数の湖畔、山頂に至るまで、凡そ風景の美に鳴る所、いづれか此の名木の韻致に負ふところなからん。翻りておもふに、明治神宮の大廣前を十數幹の長松に飾れるは、國粹の樹木美を以て、齋かれませる神の御目のあた



(筆子龍端川) 松の宮神治明

他の樹木、皆神門の外に星羅して、唯だ此の木のみを神の側近に奉仕せしめたり。

りを装ひ奉れるにはあらずや。あらゆる他の樹木、皆神門の外に星羅して、唯だ此の木のみを神の側近に奉仕せしめたるは、全國の樹木が盟主たる名木を代表として、御傍らに仕うまつらせたるにはあらずや。根より頂まで枝葉の密叢せる樹木により、御目路を遮らずして、赤裸なる長幹の高く秀でたる木により、神殿をさやかに望ましめたるは、七千萬の臣子が仰望の志を成したるものにして、同時に齋かれ給ふ大帝の國土臣民を見はるかし給ふ大御心に副ひ奉れるにはあらずや。大帝の御製に

高どのの窓てふ窓をあけさせて

四方の櫻のさかりをぞ見る

大帝、此の神境に鎮まりまして廣き大御前の此の名木の長き幹の間より、内苑の外苑に植ゑ集められたる樹林を見渡し給ひ、寶物殿、繪畫館、青年館、競技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては、更に大東京を通ほして、曾て知らしめし、大八洲の光輝ある現容を見さけ給ふ。

と宣へるあり。恭しく思ふに、大帝、此の神境に鎮まりまして、廣き大御前の此の名木の長き幹の間より、内苑外苑に植ゑ集められたる樹林を見渡し給ひ、寶物殿、繪畫館、青年館、競技場等のあらゆる設備を見そなはし、延いては更に、大東京を通ほして、曾て知らしめし、大八洲の光輝ある現容を見さけ給ふならん。しか思ふは、畏けれども、國民無上の心強き想像にはあらずや。

松は日本の選ばれたる木にして、美容と、品位と、節操と、重疊累積せる傳統とを有する樹木なり。今や此の名木を以て我が大帝の大廣前を飾り奉る。吾等は此の計畫の言語に絶して實に意味深さを感じずんばあらず。

島村抱月

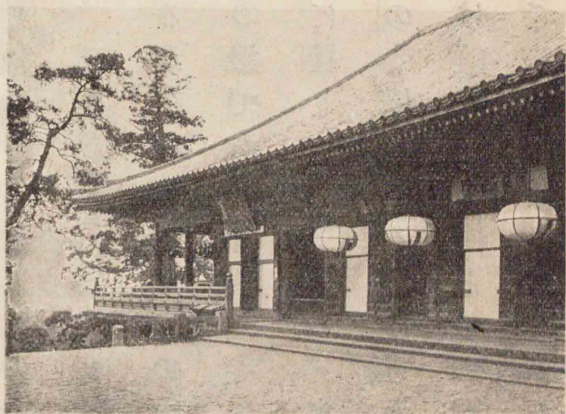
明治大正の文學者
元早稻田大學教授
藝術座の創立者
名は瀧太郎
石見の人
大正七年歿
年四十八

二月堂と三月堂

島村抱月

二月堂と三月堂とは手向山のすぐ下に隣して立つてゐるが、奈良の古堂塔の中で最も境地のすぐれてゐるのは、此の邊である。興福寺の五重塔は、偉觀には相違ないが人家に接しすぎてゐる。東大寺金堂の大佛殿は大きい、唯だの寺構である。ひとり二月堂、三月堂、四月堂等の一群は、かけ離れて周圍との調和に特殊の意味を現はしてゐるが、中でも其の意味の中心を代表してゐるのは三月堂である。眞に千年以上の古堂院に接するときの、畏れと靜寂と神祕

二月堂と三月堂
とは榮と寂、生
と死との對照で
ある。



二月堂

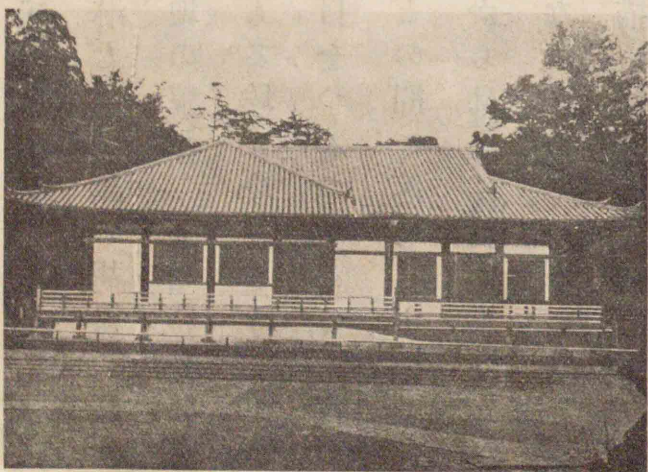
とが、此の建物の前に立つた時に感ぜられる。

三月堂は千一二百年前の造營にかゝり、奈良最古の建物であるといふ。之れに隣して、半ば山に據り雄大な構をなしてゐるのは二月堂である。二月堂と三月堂とは榮と寂、生と死の對照である。而してこの古都に古寺院を觀んとする自分等に取つて、現在の榮と生とが如何に殺風景に、過去の寂と死とが如何に高貴に感ぜられることであらう。二月堂の觀音は今も諸人の信

千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。

仰厚く、本堂からは御みくじも出ればお札も出る。堂めぐりのお百度を踏む者もある。お水取りの儀式もある。要するに眼をあいて生きて繁昌してゐるのが二月堂である。

三月堂は其の傍らの平地に立つたまま、千年の戸はすべて鎖されて、寂然として永久の眠りに入つてゐる。奈良へ來て觀る寺は、斯うでなくてはならないと思ふ。松、杉、檜の巨木に色々の紅葉を綾どつた背景



三月堂

折しもの薄れ日
がさして、一面
の落松葉にかす
かな香ひがあ
る。

屋根瓦の苔、金
物の錆、柱の朱
の剥けの淋し
さ、軒裏の胡粉
のわびしさ。

寂寞の氣が人を
襲ふ。

や翼景やに圍まれて、白く打開いた寺地には、折しもの薄れ
日がさして、一面の落松葉にかすかな香ひがある。 屋根瓦
の苔、金物の錆、柱の朱の剥げの淋しさ、軒裏の胡粉のわびし
さ、木材の朽ちて黒み細つた木地の荒れ。 薄暗い光の落ち
込む堂内には、大香爐の上に積もる埃が冷たさうである。
そこを離れて石段に腰をかけ目をつぶつてみると、寂寞の
氣が人を襲うて来る。 二月堂との間に落ちる水の音も次
第に消え行き、刹那の寂寞の中からは全く別な世界がひろ
がつて来る。 千餘年の昔、こんな大建築のプランを、細かい
一線一畫の末までも頭の中に描いた其の人の頭と、今の吾
吾の頭との働き工合などを比べて考へて見る。 斯うして

茫然としてゐる十餘分間は實に貴い時間であつた。 (下略)

三 翳 引

正 岡 子 規

七浦の夕雲赤し翳引

秋淋し毛蟲はひ行く石疊

正岡子規
明治の俳人
名は常規
伊豫松山の人
明治三十五年歿
年三十六
七浦
安房國安房郡

ゆふやけて日和に
なりぬ秋の雲
子規

ゆふやけて日和に
なりぬ秋の雲
子規

讀 筆 規 子

すぐくと月さし上る野分哉
行き暮れて大根畑の月夜かな

錢よむ音。

乞食の錢よむ音の夜寒かな
 穴にのぞく餘寒の蟹の爪赤し
 雪残る頂一つ國境
 春雨や傘高低に渡舟
 島々に灯をともしけり春の海
 青々と障子にうつる芭蕉かな

四 膽 力

嘉納治五郎

嘉納治五郎
 教育家
 前東京高等師範
 學校長
 攝津の人
 萬延元年生
 從容自若として

大丈夫と生れた甲斐には、死生の境に出入しても、從容自若として事に当たり、天下の大事を談笑の間に決するだけ

事に当たり、天下の大事を談笑の間に決す。

膽力は天稟に之れを有して居る者も少なからずあるが、必ずしも修養によつて得られぬものではない。



嘉納治五郎

悠然として身を持つることが出来る。

膽力は、天稟に之れを有して居る者も少なからずあるが、必ずしも修養によつて得られぬものではない。

はない。上杉謙信が十四五歳の時、大敵に追はれながら、門番所の板敷の下に潜伏して安眠して居たといひ、徳川光圀が六歳の時、暗夜に刑場へ行つて死人の首を持つて歸つた

Viscount Horatio Nelson
(1758-1805)

といひ、ネルソンが幼い時から恐怖の何ものたるかを知らなかつたといふが如き、これらは皆天稟と見るべきものであるが、しかしながら修養によつて剛膽の人となつた例も、亦決して稀れではない。

昔、武田信玄の家臣に岩間大藏左衛門といふ者があつた。その容貌はいかにも魁偉で、一見したところ儼然たる大丈夫であつたが、その性質は至つて臆病であつた。信玄は之れを實戦に試みたが、彼れは七たび進んで七たび退いた。信玄は、これはとても普通の方法では矯正されぬと思つて、ある日の戦争に、大藏左衛門を楯に縛つて、掩護物の少しもない吹きさらしに置き、しかも眞向きに敵に向かはせて、一

運さへ強ければ
雨と飛ぶ矢丸も
身の中たるもの
ではない。

集大成

嘉納 治五郎 筆

歩も身動きの出来ないやうにした。その中に戦が酣になると、矢丸は雨のやうに飛んで来る。銃聲は雷の如くに轟く。大藏左衛門は恐れをのゝいて殆んど死人のやうになつたが、しかしその戦の最後まで、矢一つ丸一つにも中たらなかつた。そこで大藏左衛門は翻然として悟るところがあり、運さへ強ければ、雨と飛ぶ矢丸も身の中たるものではない、死は少しも畏るゝに足らぬものであると達観して、その後は戦争の度毎に奮進勇戦して、遂に武名を揚げたといふことである。

諦めるといふ心の持方の膽力養成に必要である事がある。

之れを見ても、諦めるといふ心の持方の、膽力養成に必要なることがわかる。危険、災害等の身に迫る場合に於いて、成るべく之れを避けようとするのは、自然の人情には相違ないが、しかし、さういふ心の爲めに却て怯懦に陥る事がある。之れに反して、最悪の結果を身に受けても是非に及ばぬと覺悟を極めれば、膽が自然にすわつて來るであらう。例へば、眞劍勝負をする場合に、命を惜しんで敵刃を逃れようとしてはならぬ。まづ身を捨てる覺悟をきはめ、吾が骨を切らせて敵の命を奪へ」といふ通り、死に身になつて、その上に吾が手段と伎倆とを盡くせば、命を惜しむよりは遙かに自由が利いて、意外の働きをすることが出来る。強ひ

死に身になる。

伎倆を現はす。

落膽喪神は、時としては、その危険の結果を豫想した後ではなく、直接の瞬間に於いて衝動的に起こつて來る

て危害を避けようとする、煩悶し、疑惧し、狼狽するので、自械自縛の結果、十分の伎倆をも六七分しか現はし得ずして、見るにも及ばぬ不結果を見ることがある。けれども諦めるといふ心の持方の練習を積んで居る者は、危害が身に迫つた時にも、此の場に臨み、狼狽したところで仕方が無い、只今執るべき方法は唯だ一つあるのみ」と觀念し、その方法に全力を注いで、さて敗れたならばそれまでと覺悟を極めてかゝるから、別に惶れ惑ふやうなことがないのである。

落膽喪神は、時としては、其の危険の結果を豫想した後ではなく、直接の瞬間に於いて衝動的に起こつて來ることがある。これは動物の本能の一つで、殆んど制止し難き勢を

ことがある。

以て發動するものであるが、かういふ場合に何か良い工夫がないであらうか。

雲居

元和年代の奇僧
松島瑞巖寺に住
し、伊達政宗に
優遇せらる。
土佐の人

ぐつと頭をつか
んだ。和尚は立
ち止まつたま、
動かなかつた。
少年は遂に手を
放した。

雲居和尚は、伊達政宗に招かれて松島の瑞巖寺に住して居た名僧である。和尚は毎夜雄島の石窟へ往つて坐禪をして居たが、或時一人の少年が、和尚の悟道を試さうと思つて、路傍の松の枝の間に隠れ、和尚がその下に來たところを窺つて、手を延ばしてぐつと頭を攫んだ。和尚は立ち止まつたま、動かなかつた。少年は遂に手を放した。數日の後、その少年が雲居を訪ねて、「近頃何處か淋しい處で怪物に御出會になつたことは御座いませんでしたか。」と尋ねると、和尚は答へて、「いや別に何にもあはない。たゞ五六日前の

夜半に、窟から歸る途中で、闇の中から自分の頭を攫んだものがあつたが、その手に温みがあつたから、おほかた子供等の悪戯であつたらう。」といつたといふ事である。この雲居の沈勇が如何にして養はれたか。思ふに必ず心膽を練つた結果であらう。

こゝに斯様な場合に處すべき簡單なる一方法として、少年者に告ぐべき事がある。他ではない、下腹に力を入れることである。これは氣を落ちつける一法として、經驗上、古來有効と認められて居るものである。世には、理窟の上から妖怪の無いことを信じてゐながら、暗夜墓地を通過する際、石塔の陰から突然飛び出す犬の影に、思はず膽を冷すも

衝動的に起る
恐怖心を去る簡
單なる一方法は
下腹に力を入れ
ることである。

泰然自若として
己れを失はな
い。

杉村楚人冠

文學者

東京朝日新聞記

名は廣太郎

和歌山縣の人

明治五年生

のがある。かういふ時に下腹に力を入れると、今飛び出したのは、犬か、猫か、或は他のものか、判断が付き易くなるであらう。衝動的に起こる恐怖心を去るのも、畢竟鍛錬の功に待つ外はないのであるが、吾等は年少の人に對し、まづ手始めに此の方法を實驗されることを勧める。さうして終には段段工夫を凝らし、修業を積んで、天地の顛倒するやうな大變に逢つても、泰然自若として己れを失はない様な剛膽な人となられることを望むのである。

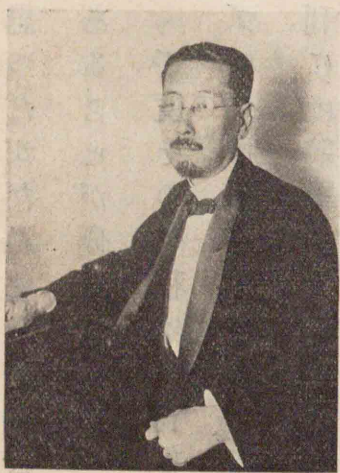
五 ものの出端

杉村楚人冠

我孫子
千葉縣

木訥らしい様子。

にたと笑つて會
釋した。



冠人楚村杉

上野から我孫子の宅へ歸る汽車の中で、日暮里から乗り込んだ外國人の一行に逢つた。若い夫婦とお母さんらしい老女と、六つか七つの男の兒と、總勢五人で、よく西洋の田舎の汽車の中で出つくはすやうな、木訥らしい、達者らしい様子をした人々であつた。中にもお婆さんは、丸々と太つた、赤い顔の、如何にも人のよささうな顔をしてゐたが、これが車に入るなり、私の方を見て、にたと笑つて會釋したところは、丸で何處かで見ることがあるやうに覺えるほど、親しみのある様子であつた。

私は之れを見て、初めはロシヤの百姓の一家族だらうと思つたが、だん／＼語り合ふ事を聞いてゐると、ドイツ語であることが分かつた。

丁度その時、私は夕刊を讀んでゐた。その日はヒンデンブルグ將軍が大統領に當選した電報の入つた日で、その夕刊には、將軍の大きな寫眞がれい／＼と出てゐた。思ひなしか、若い妻君は時々その寫眞を、のぞき込むやうに見てゐるらしかつた。

兎に角ドイツの大統領が定まつたといふ事は、ドイツ人に取つて重大なニュースである。殊に見たところ、保守的な顔をしたこの人達に取つて、ヒンデンブルグの當選はマ

Hindenburg
世界大戦當時の
獨逸の將軍

將軍の大きな寫
眞がれい／＼と
出てゐた。思ひ
なしか、若い妻
君は時々その寫
眞を、のぞき込
む様に見てゐる
らしかつた。

Mark
現ドイツの政治
家

ルクスのそれよりは喜ばれるに相違あるまいと思つた。日本の夕刊に始めて出たことだから、まだこの人達に分かつてはゐるまい。たとひヒンデンブルグびいきでなくても、知らせてやれば、さぞ喜ぶことだらうと思つた。

知らせてやらうか、どうしようかと私は迷つた。私がロシヤやフランスの田舎を旅行してゐた時、時たま下手な英語で話しかけて来る人があると、嬉しいものであつたことを覚えてゐる。下手でも何でも意味が通じさへすればいいのだから、何とか言つてやらうと思つたが、何となく氣後れがして、いひ出せない。今まではずんでゐた夫婦母子の話が途切れ／＼になつて、何心なく私の方を見やる時、今度

何となく氣後れ
がして、いひ出
せない。
話がはずむ。

言葉が器用に口から出ない。

President

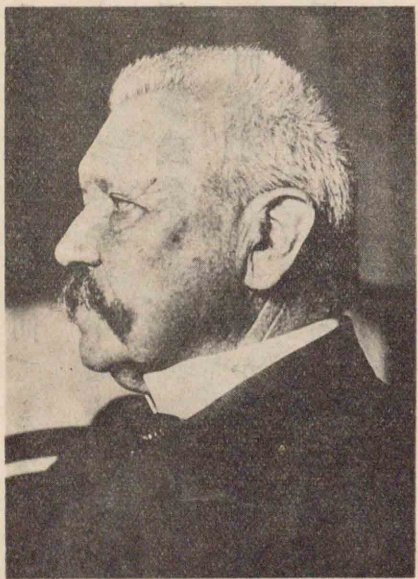
Telephone

こそは言はうと思つたが、その度毎に決心が鈍つた。これが英語でいゝものなら、すら／＼とまでは行かぬが、格別考へずに用を辯ずるだけの言葉は出て来る。フランス語にしても、どうやらかうやら、考へればそれ位の意は通ずることが出来る。が、何分ドイツ語と來ては、三十年前に習つたきりで、曾て使つたことがないのだから、どうしても言葉が器用に口から出ない。第一「大統領の事」を何といふだらうか。フランスならラテン出の言葉だけに、英語のプレシデントが直ぐ通ずるに極つてゐる。チユートン語原のドイツ語では、さうは行くまい。國語のやかましいドイツのこととして、誰れにも通ずる「テレフォーン」ではギリシヤ

Pernspracher

目のかたきにする。

見す／＼分かつてゐながら。



アルアンデンロ

臭いとして「フェルンシュプレッヘル」とやら言ひ直して喜んでゐる國語擁護運動さへあると聞いてゐる。うっかりラテン臭いプレシデントなど言つて、目のかたきにしてゐるフランスのひいきでもする者のやうに思はれてはつまらない。いはんや相手が見す／＼ドイツ人と分かつてゐながら、英語で話しかけるのも氣が利かない。お前等の話してゐるのはドイツ語であることを、おれはちやんと知つてゐるぞ、と示してやりた

出端を失ふ。
あつさりやる。

無上に氣ばかり
せかくする。

い一種の虚榮心もある。

出端を失ふといふことは妙なもので、初めにあつさりとやつてしまへば、何でもなかつたらうに、今になつては、何とも取りつきやうがない。さりとして、知らせずにしまふのも何だか残念な。

何處で下車するか分からぬから今の内に話さなければ、折角喜ばせようとする、好意が無になる。無上に氣ばかりせかくする。

龜有の停車場近くになつて、到頭思ひ切つて、新聞の寫眞を男の前につき出しながら、この人が大統領になりましたよと、英語でやつてしまつた。

「さうですか、昨日が選舉でしたね。どうも有難う。」と男は私より遙かに上手な英語ですらくと答へた。なアんの事だと、私は思つた。

しかしその男が寫眞を細君に見せて、二人で私の方へ挨拶した時、——この話を夫婦から聞いたお婆さんが、非常な喜び方で、「オー、オー、ヒンデンブルグ！」と、幾たびか例の人なつこい眼を私に向けて禮を言つた時。——私はよい事をしたと思つた。

六 狩野芳崖とフェノロサ

狩野芳崖
明治の大畫家
長府の人
明治二十一年歿
年六十一

嗚矢
フェノロサ。
Panofosa
(1853—1896)
アメリカのイサ
チーセツ州の
人明治十一年來
朝

全國に瀰漫し
た。

陋巷に埋もれ
る。

我が國に於ける近代的な美術展覽會の嗚矢ともいふべ
き第一回繪畫共進會が上野に開かれたのは、明治十五年の
九月であつた。飛んで翌々年の四月にその第二回が同じ
上野に開かれた。維新以後十幾年、歐化の思潮が全國に瀰
漫して、學者、政治家、教育家、誰れ一人、由緒深い我が國固有の
藝術を顧みる者がなかつたのに、今や國粹保存の機運がや
うやく芽ぐみ始めて、とにかく政府主催の下に、國本位の繪
畫展覽會が開かれる運びとなつたのである。久しく陋巷
に埋もれてゐた畫家達が奮ひ起つて出品を競つたのも無
理はない。

狩野芳崖も此の機運に乗じて奮起した一人であつた。

心血をそ、いだ
作品。

賞讃ではなくし
て罵倒であつ
た、喝采ではな
くして冷笑であ
つた。

けれども、彼れが心血をそ、いだ作品も、當時の社會からは
殆んど顧みられなかつた。第一回目は、唯だ陳列されたとい
ふだけであつた。第二回目は三等賞を貰つたが、それは
入賞中の最下位のものを得たに過ぎなかつた。後者は「花
下奔馬の圖」と題して縦四尺、横二尺程の、小幅ながら極めて
見事な出來で、作者も私かに許した傑作であつたが、しかも
それが社會から得た所のものは、賞讃ではなくして罵倒であ
つた、喝采ではなくして冷笑であつた。

さすがの芳崖も、内心がつかりして居るとある日、不思議
な客が彼れの陋屋を音づれた。客は碧眼紅毛の西洋人であ
つた。取次ぎに出た彼れの妻は、少しく狼狽した氣味で、

あたふたと芳崖の居間へ来た。

「妙な人が訪ねてまゐりましたよ。あなた、西洋人が……」

「西洋人？」 芳崖も怪しんだ。

「一人でか？」



「いえ、通辯が随いて來まして、先生エの今度展覽會へお出しになつた御作サを拜見して、大變感心ロしましたので、急にお目に懸かりたく

なつて伺ひましたと、かう申します。」

芳崖の眉はピリ、と動いた。「西洋人の癖に生意氣な口を利きをる。不在と言つて追

眉がピリ、と動いた。

争つても無駄。

狩野友信

畫家
濱町狩野の裔
大正元年歿
年七十

つ拂つてしまへ。」

「でも、居りますと言つてしまひました。」

「ぢや、仕方ない。氣分が悪くて臥せつてをるとでも言つ



狩野友信

ておけ。會ふのは厭だ。」

夫の氣象を知つてゐる妻は、争

つても無駄だと思つたので、玄關

へ出て、その通りに斷つた。

西洋人は、その日はその儘引き

取つたが、二三日すると、又訪れた。そして今度は芳崖の入

魂なる狩野友信の紹介状を持つて來た。それによると、こ

の人はエルネスト、フェノロサといふアメリカ人で、東京大

卓絶した鑑識を持つてゐる。

學にお雇教師として數年來教鞭を執つて居る學者である、そして東洋美術に對して卓絶した鑑識を持つてゐるといふことである。

これを讀んだ芳崖は、さすがに前のやうに面會を謝絶する譯には行かなかつた。けれどもいかに友信の證明があるにせよ、こんな西洋人に日本畫の眞趣が味解されるわけがないと思つたので、洒落な芳崖は、一つ試験をして見ようといふ氣になつて、彼れを伴つて舊藩主なる毛利公の邸へ出かけた。

毛利邸へ行つて、芳崖は公爵家所藏の懸物や繪卷物をあとかからくくと出しては示した。けれどもこのアメリカ人

日本畫の眞趣を味解する。

會我蛇足

足利期應仁頃の畫家
李秀文の子名は宗譽、通稱は式部、道號は宗丈
文明十五年歿

は、唯だ「ハア〜」と云つて見て居るばかりで、容易に感嘆の詞を洩らさなかつたが、最後に女中部屋から會我蛇足オウゼツの屏風繪を取り出して見せると、彼れは始めて會心の笑みを浮かべた、そして云つた。

「これはいゝ。これは實にすばらしい傑作です。」

之れを聞いて、芳崖は驚嘆した。實を云ふと、それまではわざとさまでにもない物ばかりを仰山にして見せたので、價値ある作物は、やはりこの蛇足一つだけであつたのである、そして其の傑作をば、わざとむさくろしい女中部屋から引き出して見せたのであつた。

こゝに於いて芳崖は始めて胸襟を開いてフェノロサと

胸襟を開いて語り合ふ。

語り合ふ氣になつた。そして話せば話す程、此の米國の學者の並々ならぬ鑑識と蘊蓄とに感心した。そして西洋人の中にもかういふ人が居るかと思ふと、自分の今までの考へ違ひを、恥ぢずにはゐられなくなつた。

フェノロサは言つた。

深い憧憬の情を持つ。

「私は國に居つた頃から、日本の美術に對して深い憧憬の情を持つて居りました。けれども腹藏なく申すと、實際日本の土地を踏むに及んで、すっかり失望したのです。過去の日本美術は偉大です。しかし現在のそれは沈衰の極に陥つて居ります。それは今度の共進會を見てもよく分かります。あの會には、御國の一流の畫家の作が

沈衰の極に陥る。

獨創がない。

幾百と陳列されて居るのに、それが悉く死んで居ます。みんな古人の眞似事をやつてゐるばかりで、獨創といふものが少しもありません。大きな期待を抱いて會場へ行つただけに、私は實にがっかりしました。さうしてもう諦めて歸らうと思つた時に、あなたのお作がフト目に留まつたのです。私はハツとして、四邊が急に明るくなつた様に感じました。どうだらう、この恐ろしい力は！熱は！私の求めて居たものはこれだ！これであつたのだ！私は思はず口へ出して、さう言ひました。こんな優れた作家があるのに、どうして日本の社會が認めないのであらう、何とも言はないのであらう。とにかく

どうだらう、この恐ろしい力は！熱は！私の求めて居たものはこれだ！これであつたのだ！

餘りにも無理解
な一般世間の仕
向に對しては、
さすが不屈の芳
崖も、ともすれ
ば絶望的の氣持
にならうとし
た。

私はその人に會はなければならぬ。會つてその人の
意見をも聞き、私の思つてゐる所をも述べなければなら
ない。さう思つて、此の間もお訪ねしたやうな譯なので
す。あの時はお目にかゝれませんでした。今日のかう
して十分お話を伺ふことが出来て、こんな嬉しい事はあ
りません。」

けれども嬉しかつたのは、たゞフェノロサ一人ではない。
芳崖は更にそれよりも嬉しかつた。餘りにも無理解な一
般世間の仕向に對しては、さすが不屈の芳崖も、ともすれば
絶望的の氣持にならうとしたが、もう今日からは悲しむに
も歎くにも及ばなくなつた。彼れには今や眞に己れを知
つてくれる友が出来たのである。

確固不動の自覺。

理論上の根據を
掴む。

Easton

その日を始めとして、芳崖とフェノロサとの交情は日増
しに深くなつた。フェノロサの激勵によつて、彼れは確固
不動の自覺を得た。フェノロサの與へた美術上の新知識
によつて、彼れは自分の創作に對する理論上の根據を掴ん
だ。「日本の社會が理解してくれなければ、世界を相手にし
て描くまでの事だ。」彼れはさうまで考へるやうになつた。
今、上野の東京美術學校第一の校寶とされてゐる「慈母觀
音」ボストン博物館に陳列されて日本美術のために氣を吐
きつゝある「鍾馗捉鬼の圖」、その他、彼れの名を不朽にした幾
枚かの大製作は、それから僅か四年、たゞ四年しか生きる事

の出来なかつた彼れの最晩年の極めて短い期間に描かれたものである。
〔明治美談に據る〕

穂積律之助
海軍造船少將

七 潜水艦上の或る日 その一

穂積律之助（講演）

或る國と或る國と戦ひ半ばの或る日に、あなた方が私と一所に、一隻の潜水艦に乗つて荒海を航行して居ると思つて下さい。

今、吾々が立つて居るブリッジ——船を操縦する爲めに甲板から一段高く作られて居る、此のブリッジから見下すと、船の長さは五十間あまり、一町に少し足りない位。船體は

Bridge

寂しく取り残された大砲。

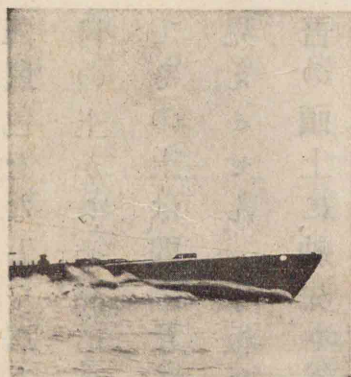
薄鼠色をなして居り、其の甲板は水を潜るといふ特別な役目の上から、普通の船のよりは遙かに低く成つて居る。そしてその上は、間斷なく波に洗はれて、前にも後にも人影一つ見えません。甲板の上には、寂しく取り残された大砲と、吾の頭上に、舳先から艦まで張り渡された二本の太い針金との外に、これといつて目立つものもありませんが、これは潜つてからの水切りを出来るだけよくする爲めです。——この頭上の針金は、大砲やブリッジの様な背中の出つ張りものが、敵が水中に張りまはした待網まちあみに引つかつて、魚の様に生捕られない爲めの用心に設けたものです。——外に無線電信の檣はありますが、これは圓い鋼はがねのパイプで出来て居

Pipe

大鯨の背に身を托して、空と水との真中に漂つてゐる様な気分。

Screen
Cinema
Handle

劇。驚天動地の大活

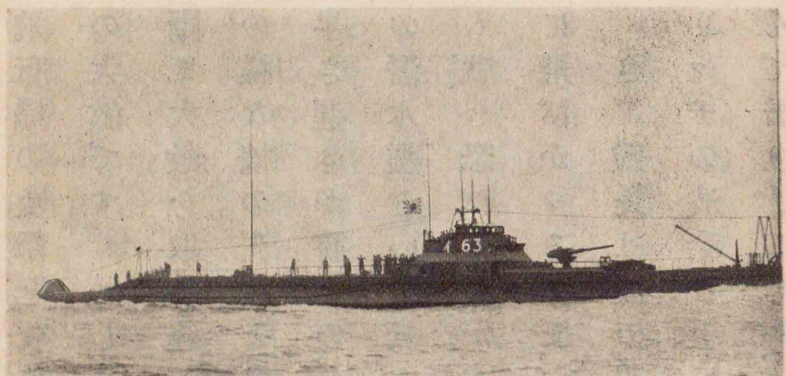


水 潜

て、機械の力で自在に立て起こしが出来るもので、今はそれを甲板の溝の中に倒してあります。さてこの不思議な形を見下して居ると、船に乗つたといふ感じは消えて、大鯨の背に身を托して、空と水との真中に漂つて居る様な気分になります。そして長く航海を續けると、白い波頭と、其の間に見えがくれする水平線ばかりに飽き果てた気分になります。空白のスクリーンがシネマのハンドルの一回轉によつて、驚天動地の大活劇を映し出すやうに、この單調な水と空とが、何時どのやうな歴史

歴史的な事件を演出する。

油断大敵。



艦 船 圖

的な事件を演出するか、計り知る事が出来ないのです。さてこの低いブリッチから目のとゞく海面は、あなた方には、如何にも廣々と感ぜられませうが、廣漠たる大海原に比べると、百疊敷の中のほんの一寸四方か五分四方にも當たりません。それで、油断大敵といふのには、二つの意味があります。一つは急行列車よりも早く飛びかゝつて来る驅逐艦や、

木葉微塵に打碎
かれる。

針の様な檣の
先、雲よりも淡
い一沫の煙。

氣まぐれ者

怯めず臆せず飛
ひかゝる。

飛行機の攻撃を受けて、木葉微塵に打碎かれるといふ心配の大敵です。然し、それよりも氣づかほしいのは、一寸の油断で大敵を取り逃がす恐れです。水平線上に現はれる針の様な檣の先、雲よりも淡い一沫の煙、これを認める數秒の早さ遅さが勝敗の分かれ目になるのですからね。實は、この潜水艦といふ氣まぐれ者は、水の上では小さい驅逐艦にも戦そのき恐れますが、水の中からは、大軍艦にも怯めず臆せず飛びかゝるので、かういふ大きい事もいへるのです。さて艦長は、波の間にく揺籃のやうに動揺する狭いブリッジの波除け板に身を寄せて、鋭い眼で、ちツと行手を睨んで居りましたが、突然そばに立つて居る中尉を呼んで、黙

張り切つた顔の
筋肉をゆるめて
互に會心の微笑
を漏らす。

つて、ある方向を指しました。二人は急いで、双眼鏡をかざして、二言三言さゝやき合ひました。二人はやがて目を双眼鏡から離しましたが、やがて張り切つた顔の筋肉を少しゆるめて、互に會心の微笑を漏らしつゝ、うなづき會ひました。そして、

「潜行準備！」

嚴かな艦長の命令が、直ちに艦内に響き渡りました。

司令塔は、船の背に駱駝のこぶの様に飛び出した、ブリッジの土臺を作つて居る鋼板の塔ですが、これはこの船に取つては、頭の骨ともいふべき大切な所です。今にこゝへ、この船の脳髓たる艦長が飛び下りて來ます。さて艦長は前

敵と睨んだ櫓の先がこちらに向つて来る。

嵐の前の静けさと云つた緊張した沈黙。

の命令によつて、何時でも潜れる様に、部下を持場々々につかせましたが、今度は中尉と二人して、敵と睨んだ櫓の先がこちらに向つて来る様子によつて、潜る前に必要ないろいろな観測を下して居ります。

一分！ 二分！ 嵐の前の静けさと云つた緊張した沈黙が、しばらくつゞきます。

突然艦長は「潜航！」と鋭く叫びながら、司令塔に飛び込みました。つゞいて飛び込んだのは中尉です。中尉は、入口の鐵蓋をバタリと閉ぢて、手早く之れを締めつけました。そして今迄規則正しい響を傳へて運轉してゐたダイゼル機關がピタリと止まつたかと思ふと、電氣のモーターがブ

Tank

ンブン鈍い唸り聲を立て、廻り出しました。すべて潜水艦は水面上にある時は重油の爆發を利用するので、かの自動車の發動機を大きくしたやうなダイゼル機關によつて推進されるのでありますが、潜航の際には電力がそれに代はるのです、そして、その電力は船の底に積んである二百あまりの大型の蓄電池から取るのです。

やがて何處ともなく大きな瀧の様な水音が聞こえて來ました。これは、タンクの口が一時に開かれて海水がその中に漲り込む響です。この船は全體が二重に出來て居て、外側は先程ブリッジから見下した通り、水切りのよい形の船體ですが、内側はこの司令塔の下に前後に横たはつて居

る丈夫な鋼の筒なのです。先づ薬をきざむ薬研の中に、お茶の罐を入れて蓋をしたといふ形でせう。その内側と外側との間の大きな場所が、全部タンクになり、艦首から艦尾までの間がいくつもの部分に仕切られて居て、その、一つ一つに、水の入る口と空気の逃げ出す穴とがあります。それが今「潜航」といふ命令で、その口が開かれたのですから、海の水はどん／＼と二重船體の間に流れ込んで、刻々にこの船の重さが増して來ます。そしてそのタンクが一杯になると、丁度鯨や龜の身體のやうに、水と同じ重さになり、飛行船がフワリ／＼と空中を歩くと同じ工合に、水の中で自由に浮き沈みが出来ゝるやうになります。

ほんの束の間、一分と経たない中に、私共は魚になつてしまひました。

Periscope

かくしてほんの束の間、一分と経たない中に、私共は魚になつてしまひました。水の上に残るものは、たゞ太さ二寸位のペリスコープの先が二三寸ばかり、それが始終波の間に見え隠れして居りますが、その頂上にレンズの装置があつて、それに映ずる海上の有様をば、反射鏡の作用によつて、艦長は水面下に没した司令塔内に居りながら、手に取るやうに見ることが出来るのです。

今、艦長はペリスコープのハンドルを忙しく廻しながら、前後左右の海面に目を配つて居ります。同時に、低い乍らハッキリとした口調で、舵取りに命令を下しつゝ、目ざす敵の大軍艦が、數隻の駆逐艦に守られ乍ら進んで來る行手を

今までの苦心が水の泡となる。

さへぎる様に、この船を操つて居ます。しかし、水に潜つてからは、水面を走る時よりも水當りが多くなり、それに電池の力にも限りがありますから水の上の半分も速力が出ません。それですから敵の進む方向やその速さを誤りなく見きはめて、一番の近道を取つてその前に忍びよらなければならぬのです。一步を誤つて取り残されたら最後、今までの苦心も全く水の泡となり、目ざす敵艦に追いつくなどは思ひもよらないのですからね。

八 潜水艦上の或る日 その二

穂積律之助(講演)

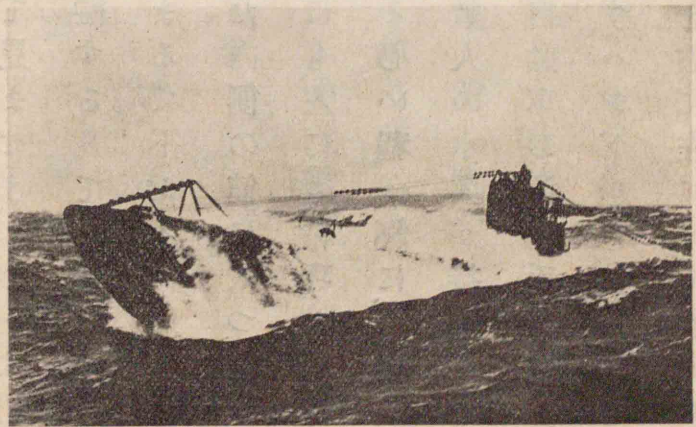
目まぐるしい程一杯に、一寸の隙間もなく取付けられて、

ハンドルを右に左に忙しさに操つて居ます。

今の間に、此の下の部屋に降りて見ませう。こゝは司令塔のすぐ下にあつて、この船を操縦する凡ての機械が動いて居る大切な部屋です。それがまるでトンネルに入つた様に天井が圓いのは、前にお話した内側の筒に入つたからです。前後の壁にも、天井にも、右にも、左にも、精巧な機械やら、齒車やら、パイプやらが、目まぐるしい程一杯に、一寸の間もなく取付けられて、その間に、數人の水兵が持場々々を守つて居ます。其の中の二人は、自動車の運轉手が、自動車の眞つしぐらに走る時でも、絶えずハンドルを動かして居る様に、各々の前にあるハンドルを右に左に忙しさに操つて居ます。この二人が、この船の前後に魚の鱗のやうに

兩方に出張つて居る、あの舵を動かして、艦長から言ひつけられた深さから浮きも沈みもせぬ様に、釣合を取つて船を進める役です。そしてその目の前にある一本針の大時計の様なもの、今潜つて居る深さを示すもので、今その針が五十といふ所を指して居るのは、私共が水面から五十呎の水中を潜つて居ることを示して居るのです。

この人々の真中に、一人の大尉



艦水潜るすとんせ航潜に將

内助の功を全うする女房役。

手ぐすね引く。

二の矢を見舞ふ。

が目を八方に配つて居ます。これがこの船の副長で、艦長が全身の注意を外なる敵の様子に集めて居る間に、この艦を艦長の思ふ通り、調子よく操縦して行く爲めに、内助の功を全うする女房役です。この部屋の前方には士官と兵員との部屋があり、また其の床下には二百あまりの電池が一杯に置かれて居ますが、その先には、今狙つて行く敵に止めをさす魚形水雷が、四門の發射管に納まつてゐるので、その室の總員が手ぐすね引いて、「打て！」の命令を待つて居るのです。また其の後方なる圓い筒の一番後ろは、一番前と同じ水雷室で、前から打つた水雷が萬が一にも外れた場合には、身を翻して後部から二の矢を見舞ふべく、抜け目なく用

意して居るのです。

突然司令塔から「深さ百呎急げ！」といふ命令が來ました。水平舵のハンドルが忙しく廻されたと思ふと、深さを示す針が六十、七十、八十とぐんぐん進んで行きます。其の中に頭の上で遠雷の様な音が、次第に遠く消えて行きました。

Propeller

驅逐艦のプロペラの音です。我が潜水艦は、敵艦を護衛する爲めにその前方遙かに進んで來る此の小さい敵には目もくれず、また幸に見つからずに、その下をうまくと潜り抜けたのです。やがて「浮き上れ、深さ五十呎、急げ！」の號令がかゝりました。いよゝゝ浮き上つて敵に肉迫する時が來たのです。艦は百呎の海底から一氣に浮かび上つて、

敵に肉迫する。

威風堂々と海を
壓して進んで來
る。

四方の海面を電
光の様に見て取
る。
鹿を追ふ獵師山
を見ず。

不覺をとる。

ペリスコープの先が水の上に出るや否や、艦長の目には、威風堂々と海を壓して進んで來る大軍艦の姿が映りました。之れを認めると同時に、艦長はグルリと身を廻して、四方の海面を電光の様に見て取りました。これは鹿を追ふ獵師山を見ぬ譬の如く、一方しか見えぬこのペリスコープを前の大敵に向けて居る中に、後から來る小敵に仕止められる不覺を取らない爲めです。その一回を終はると共に、艦長の乗つて居る圓い臺はスウツと下に下つて、艦長はペリスコープの取手を握つたまま、司令塔の床から頭が出るばかりの井戸の中へ落ち込みました。オヤと思ふと、艦長は又すぐ臺に乗つた儘、せり上つて來て、忙しくペリスコープを

動かして居ります。この忙しい上り下りは、先の太さ僅か二寸ばかりのペリスコープではありますが、船の進むにつれてそれが跳ね上げる白波を、敵に見つけられまい、同時に敵に逃げられまいの用心の爲めですから、一刻々々敵に近づく程益々忙しく繰返されます。艦長はペリスコープの先が出る度毎に、チラリ／＼と敵を見るだけですが、熟練した目には、それで總てが解るのです。やがて艦長の身體が身震ひするまでに引締つたと見ると、今度は上げたペリスコープを其の儘、ジイーツと前方を睨みながら「打てッ！」の命令を下しました。四本の魚雷は、船に僅かばかりの震動を残して直ちに飛んで行きました。魚雷は整へられたお互

の隔たりを正しく保つて、眞直に敵の横腹を目がけて突進して行きます。壓搾空氣で走らす魚形水雷の吹き出す泡が、水面に白い尾を曳いて進んで來たのに驚いた敵の軍艦は、急いで身をかはさうとしましたが、大きな身體は、思ふ様に身輕には動きません。其の中に「深さ百五十呎急げ！」の命令が下りましたが、この艦長の命令が終はるか終はらない中に、續け様に二度、船の全體がビリ／＼と震動して、雷のやうな大音響が水を傳はつて聞こえました。シーンとして耳を澄まして居た誰れもが、思はずドツと勝鬨を上げました。四本の水雷の二本が、見事敵艦に命中したのです。船はグッと前かゞみになつてぐん／＼と潜つて行きます。

シーンとして耳を澄まして居た誰れもが、思はずドツと勝鬨を上げました。

水雷の不意打に
痛手を負つた敵
艦が、見えない
敵に無念の齒が
みをして、水雷
の來た方の海面
を盲打ちに射撃
して、死物狂ひ
の一人相撲を取
つて居るので
す。

その時頭の上で、鐵板を鐵槌で叩く様なガン／＼といふ音が聞こえ出しました。水雷の不意打に痛手を負つた敵艦が見えない敵に無念の齒がみをして、水雷の來た方の海面を盲打ちに射撃して、死物狂ひの一人相撲を取つて居るのです。しかし水面にぶつかつて破裂する彈が吾々に與へる結果は、唯だそのガン／＼といふ音だけです。その間にも沈み入つた深さが次第に増して百呎を越えた時、彈の響がピタリと止むと共に、今度は石臼を挽く様な音が、之れに代はつて聞こえました。水の中では物音が空氣の中より遙かによく聞こえます。この薄氣味悪い響は、先に見た五六隻の驅逐艦が迫つて來たのです。この艦の中に備へつ

船は物に驚いた
馬の様に狂ひ出
した。

七轉八倒する。

けた水中の音を聞く受話器には、尙ほはッきりとこの音が傳はりますが、敵の驅逐艦も同じくその受話器に耳を澄まして、この船のプロペラの音を頼りに追ひ迫りました。それが、今船の直ぐ上に來て、親の仇この下にありと突止めたのです。その瞬間です。音と云ふか、震動といふか、ピンと身體を鞭で打たれた様に感ずると共に、艦内の電燈は一時に消えて、船は物に驚いた馬の様に狂ひ出しました。驚く間もなく、右にも左にも、その恐ろしい響きが續け様に起こつて、今は全く瀧壺に落込んだ小魚同様、ゴウ／＼と唸る水音と渦卷く波とに、七轉八倒するばかりです。敵が潜水艦の大禁物なる、水中で破裂する爆彈を投げ込み出したので

名人の手綱捌き
もかくやと思は
れるやうに。

す。其の時です、あなた方もその時はつくぐ、勇敢な軍人の落付きと謂ふものに感心されるでせう。電燈が消えると共に、要所々々にパッと携帯電燈が灯ともされました。艦長の命令には少しも慌てた様子がありません。名人の手綱捌きも斯くやと思はれる様に、何處まで荒れ出すかと思つたこの船も、機敏な人々の働きて乗り鎮められて、一息に二百呎の深海に潜り込みました。その中に敵の矢種も盡きたらしく、もう爆彈の音も聞こえなくなりました。

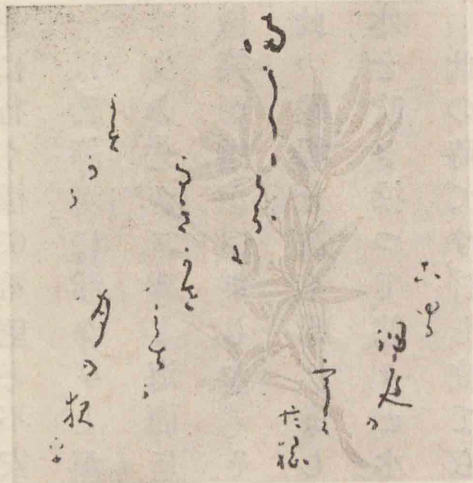
水雷を發射してから早三十分、たしかに手答へはありましたが、その後の様子が心懸かりです。新式の大軍艦は二三發の水雷で必ず沈むものとは限りません。やがて「静か

艦長の口許には
會心の微笑が浮
かびました。

に浮き上がれ！」の命令が下りました。入學試験の成績を見に行く様に、希望と不安との境をたどりながら、船は一尺一尺と靜かに浮かび上がつて行くのです。そのペリスコープの先がヌッと海面に出た時に、艦長の口許には會心の微笑が浮かびました。そして艦は再び深く水中に潜つて、此の戦場を遠く離れましたが、やがて壓搾空氣でタンクの水を吹き拂つて、悠々と水面に浮かび出でました。

此の時です、押し立てられるマストの先のアンテナから、今日の手柄が放送されて國民の喜びに迎へられるのは。

九旅



湯のやどりかどに吊せるから

佐 鮭の鱗に寒き山の冬の日

佐 佐木信綱

ましらほによきか
ぞみてて月の夜を
よすがらこゆる洞
庭のうみ 信綱

正岡子規

明治の俳人

名は常規

伊豫松山の人

明治三十五年歿
年三十六

佐々木信綱筆蹟

鎌倉にわが来て見れば宮も寺
も賤の藁やも梅咲きにけり

正岡子規

若山牧水

歌人

名は繁

宮崎縣の人

昭和三年歿
年四十四

木々はみな聳えて
空に芽をぞふく
なしみてをれば踏
む草もなし

牧水

幾山河越えさりゆかばさびしさの終てなむ

國ぞけふも旅ゆく

若山牧水

ホクけみふいえて空に芽をぞふく
かたしみてをれば踏む草もなしお水

若山牧水筆蹟

吉井勇

歌人

文學者

東京の人

明治十九年生

われは練る昨日は都大路また今日は柑子の
かんばしき道

吉井勇

東雲どき

與謝野晶子

女流歌人

寛氏夫人

泉州堺の人

明治十一年生

ほととぎす東雲どきの亂聲に湖水は白き波
たつらしも

與謝野晶子

窪田空穂

歌人
文學者
早稻田大學教授
名は通治
明治十一年生
長野の人

椰なまのかげつれぐげにも人を見て蹲りゐる
宮の鹿ども
窪田空穂

土岐哀果

歌人
東京朝日新聞記者
名は善磨
東京の人
明治十八年生

汽車おりて電話かくればこゝにしてむかしの友の聲聞こえたり(奉天)
土岐哀果

八月の廣葉を叩く
白き雨深山と思ふ
朝の軒のな 寛

八月の廣葉を
叩く白き雨深山
朝の軒のな
寛

與謝野寛筆蹟

與謝野寛

歌人
鐵幹と號す
京都の人
明治六年生

わが船のけぶりの末に星見えて夕汐たかし
天草の灘
與謝野寛

金子薫園

歌人
名は雄太郎
東京の人
明治九年生

かへり来て二日三日はまつはれる旅の心の
なつかしきかな
金子薫園

一〇 五虹の錦帶橋

吉則
山口縣美祿郡
岩國
錦川の左岸
磐國山の下

七月二十七日の朝早く、吾等は吉則よしのりを發つて岩國に向つた。名高い十露盤橋せろばんの「錦帶橋」を見るためである。岩國の停車場に下りてから電車に乗つて一里餘り行く

きれいな家並の揃った本道。

こんもりとして風情のある山。

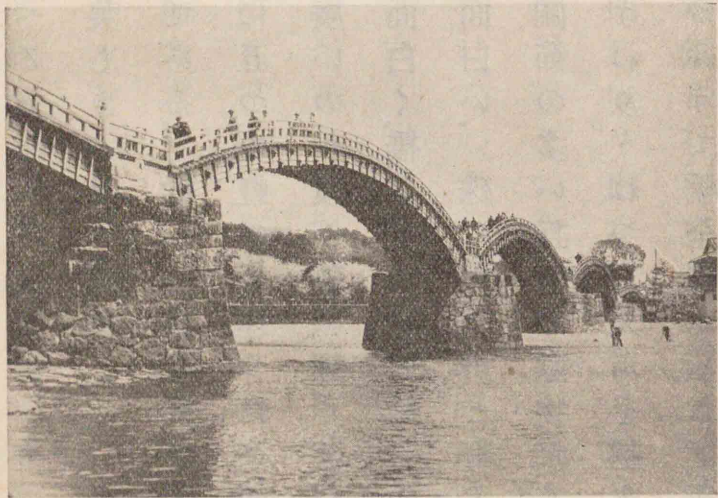
錦川
岩國川に同じ

横山村
岩國錦見町の西

弓形の橋が五つ相連つて一つの連合橋梁を成してゐる。

猿橋
甲府を去る十二里北部留郡大原

と、岩國の町につく。それから、きれいな家並の揃った本道を十町ばかり西に行くと、道路をすぐに受けて一直線につづいた長い橋が見え、其の向うに高くはないがこんもりとして風情のある山が見え、やがて橋の兩側に美しい川、錦川の名に恥ぢない實に美しい川が、瀬をなし淵をなして流れて居るのが見えて来る。この橋が名高い錦帶橋で、岩國の市街と對岸の横山村とを繋ぐべく錦川の上に架けられたものである。弓形ゆみなまりの橋が五つ相連つて一つの連合橋梁を成して居るのであるが、全體の長さは百二十五間、一番高い處は水面から六間餘りあるといふ事である。構造は甲州の猿橋と同じだといふ事であるが、同じく名橋とは云はれ



るものの、猿橋は小さい橋が唯だ一つあるだけであり、そし

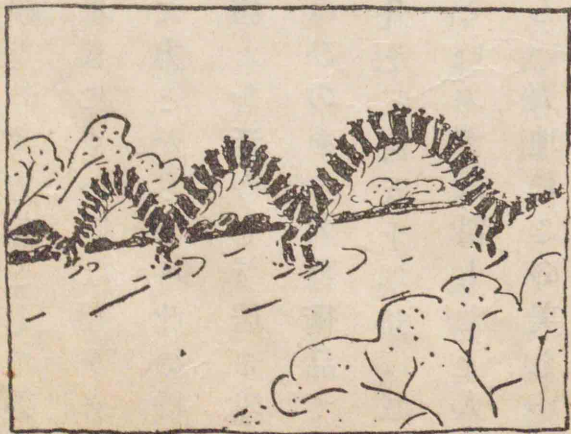
て渡る所は平らな土橋になつてゐて、上から見ては何等の奇もなく、横からは汽車の鐵橋や水道の橋やが邪魔をして景觀を害ねて居り、唯だ一つ水面に近い上流の岩頭から仰ぐ眺めだけは、さすがに面白いが、それも岩や水や山が穢いので興がさめるといふ缺點がある。それに比

錦帯橋は五箇連帯の規模が大きく美しい上に、山の美しさと川の綺麗さが助け合つて、何とも云はれぬ美観である。

關節の多い巨大な動物が、人里から山に移る爲めに蜿蜒とうねりうねつて、大川を越えて向うの山に登らうとするかのやうである。

べると、錦帯橋は五箇連帯の規模が大きく美しい上に、山の美しさと川の綺麗さが助け合つて、何とも云はれぬ美観である。縦に一線に見ても面白く、上流や下流から横さまに五つの虹の相連つた全面を見ても面白く、手近の大きい廣いのが段々狭く細く延長して行くのを斜めに見るのも面白く、橋の上で見るのも面白く、橋下の水面から仰ぐのも面白い。殊に山と川と町と橋と、全體を綜合して眺めると、關節の多い巨大な動物が、人里から山に移る爲めに蜿蜒とうねりうねつて、大川を越えて向うの山に登らうとするかのやうで、橋全體が生き／＼して居る所に、何とも云はれぬ妙趣がある。私は橋畔にたゞずんで側面から見た時に、ふ

と、是れは前世界の巨大なる動物が大川を越す瞬間に、魔の電氣に打たれて其のまゝ動けなくなり、そして長い歲月の間に、皮や肉がすっかり腐り落ちて、弓なりの骨髄だけが残つたのではないかと考へた。さう思ふと、向う岸に附いた西端の第一關節が、其の巨大な動物の頭のやうにも見え、市街に附いた東端の關節の水平に近い一つが、尾を平めたやうにも見える。私はまた山水配合の不思議な調子で、五帯の虹が同時に顯はれたので



錦帯橋の幻

世にこんな面白い橋はない、またこんな美しい橋はない。

美しい天地に美しい大存在を加へて、活きた土地を更に活かし、美しい國を更に美しくした。

はないかとも考へた。何にしても世にこんな面白い橋はない、又こんな美しい橋はない。川を渡す方便としての役目からいへば、こんな無駄の多い、歩きにくい橋はなからうが、美しさと、奇妙さと、活きくした力とから考へ、此の橋一つが眼となつて、山と川と岩國全體とを活かして居る點から考へると、實に譬へ様もない味はひのある大藝術品である。この橋は延寶元年の今から凡そ二百五十年前に、城主吉川廣嘉の架設したものであるといふが、設計した工人は誰れであつたか。私は彼等が美しい天地にこの美しい大存在を加へて、活きた土地を更に活かし、美しい國を更に美しくした手柄に對して、限りなき感謝を捧げたいと思ふ。

私はこの錦帯橋、五虹橋、龍骨橋、今にも動き出しさうな巨獸渡川橋の美にすつかり打たれた。そしてそこ〜に川向ひの吉香公園を見、更にそこ〜に繪はがきや岩國縮などの記念品を買ひとゝのへ、目先にちらつく不思議な橋の幻を大切に護つて、車上の人となつた。

〔遠近〕

一一 夜叉王

岡本綺堂

登場人名

面教師	夜叉王	源左金吾頼家
夜叉王の娘	桂	下田五郎景安
同	楓	修禪寺の僧

岡本綺堂
小説、戯曲作家
名は敬二
東京の人
明治五年生

頼家
源頼朝の長子
元久元年歿
年二十三
修禪寺
一名桂谷山寺
眞言宗

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王の住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面などを懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて、素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口は竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其のうしろは畠を隔て、塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間の家體は細工場にて、三方に古りたる蒲簾をおろせり。庭さきには秋の草花咲きたり。

娘楓門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて先に立ち、續いて源の頼家卿、廿三歳。後より下田五郎景安、十七八歳、頼家の太刀を捧げて出づ。

僧 これ、將軍家の御微行ぢや。粗相があつてはなりませぬぞ。

楓ははッと平伏す。頼家主従進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉 思ひも寄らぬお成とて、何の設けもござりませぬが、先づあれへお通り下さりませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉 して、御用の趣は。

頼家 問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に残さんと、曩に其の方を召出し、頼家に似せたる面を作れと、繪姿までも遣はして置いたるに、日を経れども出来せず。幾度か延引を申し立て、今まで打ち過ぎしは何たる事ぢや。

五郎 多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日と

は費やすまい。お細工仰せ付けられしは當春の初め、
其の後已に半年をも過ぎたるに、未だ献上いたさぬと
は餘りの懈怠。最早猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌
散々ぢやぞ。

頼家

予は生れ付いての性急ぢや。何時までも待てど暮ら
せど埒明かず、餘りに齒痒う覺ゆるまゝ、此の上は使な
ど遣はすこと無用と、予が直々に催促に参つた。おの
れ何故に細工を怠り居るか。仔細をいへ、仔細を申せ。
御立腹恐れ入りましてござりまする。勿體なくも征
夷大將軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、
身の面目、いかで等閑なほきに存じませうや。御用承りて已

夜叉

に半年、未熟ながらも腕限り根かぎりに、夜晝となく打
ちましても、意に適ふ程のもの一個も無く、更に打ち替
へ作り替へて、心な
らずも延引に延引
を重ねましたる次
第、何とぞお察し下
さりませ。

頼家

え、催促の都度
同じ事を……其

の申譯は聞き飽いたぞ。

五郎

此の上は唯だ延引とのみでは相濟むまい。何時の頃



までには必ず出来するか、豫め期日を定めてお詫びを申せ。

夜又 其の期日は申上げられませぬ。左に鑿を持ち、右に槌を持って、面は容易く成るものと思召すか。家を作り塔を組む番匠などとは事變はりて、これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜又、羅刹、ありとあらゆる善悪邪正の魂魄を打ち込む面作師。五體に漲る精力が、兩の腕に自ら湊まる時、我が魂魄は流るゝ如く、彼れに通ひて、始めて面も作られます。但し、其の時は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、我れながら確とはわかりません。

これは生無き粗木を削り、男女、天人、夜又、羅刹、ありとあらゆる善悪邪正の魂魄を打ち込む面作師。

僧 これ、夜又王殿。上様は御自身も仰せらるゝ如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取留の無い事ばかり申上げてゐたら、御痲痺が愈々募らう程に、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからうぞ。

夜又 ぢやというて、出来ぬものはなう。

僧 なんの、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある中で、伊豆の夜又王といへば、京鎌倉までも聞こえた者ぢやに……

夜又 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜

又王といへば、人にも少しは知られたもの。たとひお咎め受けうとも、己が心に染まぬ細工を、世に残すのは、如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと……さらば如何なる崇りを受けうとも、早急には出来ぬといふか。

夜叉 恐れながら、早急には……

頼家 むゝ、おのれ覺悟せい。

癪癖募りし頼家は、五郎の捧げたる太刀を引つ取つて、あはや抜かんとす。奥より桂走り出で、

桂 まあ、お待ち下さりませ。

頼家 えゝ、退け、退け。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたしまする。なう父様。
と顧みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 えゝ、己れ、前後不揃の事を申立て、予を欺かうでな。

桂 いえ、嘘偽りではござりませぬ。面は確に出来して居ります。これ父様。もう此の上は是非がござんすまい。

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を、寧ろ献上なされては……

僧 それが可い、それが可い。こなたも凡夫ぢや。名も惜

しからうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様に差上げて、お慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。黙つておるやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ、娘御、其の面を持つて来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う、早う。

楓 あい、あい。

楓細工場へ走りて、木彫の假面めんを入れたる箱を持ち出づ。桂受取りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言に桂の顔をうちまもり、心少しく解けたる體なり。

桂 いつはりならぬ證據、これ御覽下さりませ。

頼家假面めんを取りて打眺め、思はず感歎の聲を擧げる。

頼家 おゝ、見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様御顔に生寫しぢや。

頼家 むゝ。(と飽かず打ちまもる。僧はしたり顔に)

僧 さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐながら、とかう澁つて居られたは、夜叉王殿も氣の知れぬ男ぢや。はゝゝゝ。

夜叉 (形を改めて) 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じましたが、斯う相成つては致方もござりませぬ。方々には其の面おもてを何と御覽ごらんなされます。

頼家 流石は夜叉王、天晴れのものぢや。頼家も満足したぞ。

夜叉 天晴れとの御賞美は憚りな

がらおめがね違ひ。それは

夜叉王が一生の不出來。よ

う御覽じませ。面は死んで

居りまする。

五郎 面が死んで居るとは……。

夜叉 年來數多打つたる面は、生け

るが如しと人もいひ、我れも

許して居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾

度打ち直しても生きたる色無く、魂魄も無き死人の相



王 叉 夜

……。それは世にある人の面ではござりませぬ。死
人の面でござりまする。

五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きた
る人の面……。死人の相とは相見えぬがなう。

夜叉 いや、どう見直しても生ある人ではござりませぬ。

しかも眼には恨みを宿し、何者をか呪ふが如き、怨靈怪

異なんどの類……。

僧 あ、これ、其のやうな不吉な事は申さぬものぢや。

御意に適へば、それで重疊。有難く御禮を申されい。

頼家 む、とにかくにも此の面は頼家の意に適うた。持

ち歸るぞ。

夜叉 たつて御所望とござりますれば……

頼家 おゝ所望ぢや。それ。

頼家願にて示せば、桂心得て假面めんを箱に納め頼家にさゝぐ。やがて頼家立ち、五郎も立つ。

僧 やれく、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜叉王殿、

明日又逢ひませうぞ。

頼家行きかゝりて物に躓く。

頼家 おゝ、何時の間にか暗うなつた。

僧進み出でて桂に燈籠を渡す。桂假面めんの箱を僧に渡し、燈籠を持つて案内す。夜叉王はちつと思案の體なり。

楓 父様とくさま、お見送りを……

夜叉王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。

五郎 そちへの御褒美は、改めて沙汰するぞ。

頼家等相前後して出で行く。夜叉王起ち上つて、默然としてゐたりしが、やがてつかくくと縁に上り、細工場より槌を持ち來りて、壁に懸けたる種々の假面を取下し、あはや打碎かんとす。楓驚き取継りて、

楓 あゝこれ、何なにとなさる。お前は物に狂はれたか。

夜叉 切羽詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは、悔やんでも返らぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡りて、これぞ伊豆の住人夜叉王が作と寶物帳にも記されて、百千年の後までも笑ひを貽さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜叉王の名は廢つた。職人も

今日限り、再び槌は持つまいぞ。

楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人、上手で

も、細工の出来不出来は時の運。一生の中に一度でも

天晴れ名作が出来ようならば、それが名人ではござり

ませぬか。

夜又 む。

楓 拙い細工を世に出したを、さほどに無念と思召さば、こ

れからいよ／＼精出して、世をも人をも駭かす程の立

派な面を作り出し、耻を雪いで下さりませ。

と縋りて泣く。夜又王答へず、思案の眼を瞑ぢてゐる。日暮れて

笛の聲遠くきこゆ。

〔修禪寺物語〕

一二 天然の恵

千家元磨

千家元磨

詩人

東京の人

明治二十一年生

自分を空しくして。

天然の恵みに浴す。

私はたゞ眺めよう。

私はたゞ自分を空しくして

天然の與へる恵みに浴さう。

私は自然を讃へる事より出来ない。

私を貫く美は私を燃やし、

私を讚歎の情に満たしてくれる。

どこにこんな私を有頂天の喜びに

満たしてくれるものがあらう。

私を有頂天の喜びに満たしてくれる。

私はどこにも無い事を斷言する。
 おゝ、この缺ける事のない歡喜よ、
 いつも儼存する歡喜よ、
 永遠に朽ちも荒みもしない歡喜よ。
 私は本當に聖らかなこの空間を、
 溢れる愛をもつて讚め歌ふのだ。
 聖さよ、聖さよ。
 この大いなる宇宙を飾る自然の一切が、
 大いなるものも小さなものも、何と云ふ聖らかな
 神の面影を宿してゐるのだらう。
 聖にして大なる田園よ。

百姓は百姓以上のものである。
 牛は牛以上のものである。

私を高めてくれ、自然よ。
 私を鼓舞してくれ、自然よ。

百姓は百姓以上のものである。
 木に繋がれて草を食んでる牛は牛以上のものである。
 樹木も草も彼れ以上のものである。
 そこで私は我々を生かし満たす力に感謝する。
 私達の周圍を取巻くこの儼存する神祕に向つて
 私は歡喜に燃えて禮拜する。
 私を高めてくれ、自然よ。
 私を鼓舞してくれ、自然よ。
 私を恍惚としてその靈感の中に抱きあげてくれ。
 私はいつも楽しくこの靈感の中に、

鼓舞されて生きてゐたく思ふ。

〔炎天〕

一三 大同江

高濱 虚子

高濱虚子
俳人、小説家
名は清
伊豫松山の人
明治七年生

行手の白い靄は段々と濃くなる上に、右岸に近く下る我等の船からは、左岸の方を見ても薄い靄がかゝつて、さなきだに広い川幅は前にも倍して廣く、前途は茫邈として大海原の様に見えた。右岸の高い岸は、城壁と共に少しづつ低くなつて来て、其の上にポツ／＼と朝鮮人の家屋があつた。さうして白衣びやくえの朝鮮婦人が崖の細道を下りて水際に蹲踞しんがんで洗濯をして居た。衣を石の上に置いて棒を持った右

丹碧の高樓が靄の中なかから現はれ始めた。



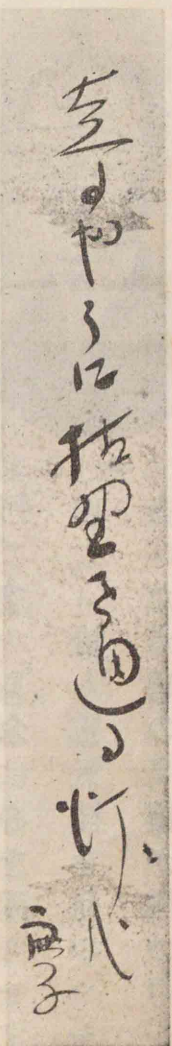
高濱 虚子
靄の中に見えて居る高い建物は何ですか。と余は心を躍らせて聞いた。恰も蜃氣樓を見るやうな古びた丹碧の高樓が靄の中なかから現はれ始めたのである。

「あの二つ見える、高い方が大同門、低い方が鍊光亭です。昔小西行長が明の大將李如松と和を講じたのが、あの鍊光亭であつたといふやうな傳説もあります。」と言つて、支局長

はいつもの微笑を洩らした。

右岸の人家はだん／＼殖えて行くばかりか、城壁もいつの間にか取拂はれて、川岸には、廣い平地が帯の様に出来、其處に澤山の貨物が山の如く積まれて、和船や、韓船や、支那の

走るやうに枯野を
通る灯かな 虚子



虚子筆

戎克^{ジャンク}などがもやつて居た。

「これは日露戦争當時でしたが、城壁を崩し岸を埋めて、貨物の陸揚げに便利なやうにしたのです。御覽なさい、此の邊の建物は皆立派なものでせう。こゝには朝鮮人で二三

大廈高樓が櫛比
してゐる。

十萬の財産のある商賣人が澤山居ります。」と、支局長は説明した。成程見ると大廈高樓が櫛比して、岸を往來する人も活氣があり、船頭等の荷物の揚げ卸しの掛聲も勇ましい。今日車上から見た彼の「邯鄲の市」の事も思ひ出だされて、此の古都の富み榮えて居る様が我が事のやうに頼もしく思はれた。

「平壤は景色のいゝ點が京都に似てゐるといふ事を聞いて居たが、此の大同江を有して商賣の盛んなところを見ると、寧ろ大阪といふ方が適當なやうですね。つまり京都と大阪とを併せて、而かも規模を擴大したといふやうなところですよ。」と余は激賞した。

「さうです。」と支局長は賛成した。洪さんは口の端に大きな皺をよせて、冷やかな微笑を湛へて居た。

「どこに着けます。」と、興味が無ささうに、黙つて我等の話を聞いてゐた船頭は、突然斯う言つて聞いた。

「税關の横に。」と支局長は答へた。

「はい。よろしい。」と、船頭は又勇ましく漕ぎ出した。其の調子が、どうしても純粹の内地人と思へなかつた。唯だ、内地の船頭ならば、退屈の餘りに鼻唄でも謠ひさうな所を、此の船頭は黙つて漕いだ。

「お前は内地に居た事があるのかい。」

「はい。福岡や、廣島や、高松に居た事があります。東京に

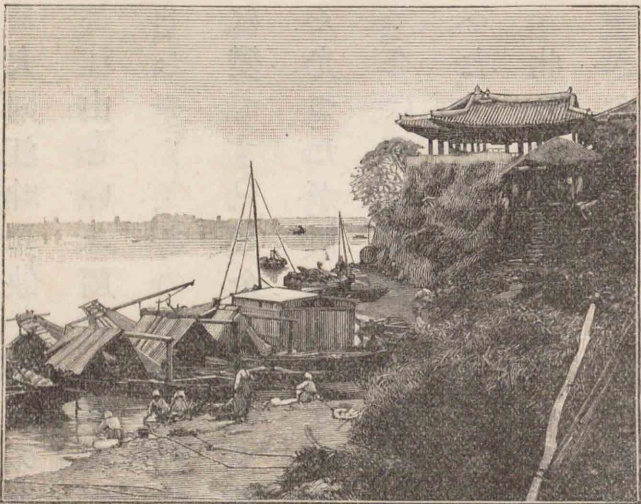
も一月ばかり居りました。」

「さうだらう。話が全く内

地人と同じだ。」と、余は讚めて遣つた。

「若いものはすぐ覚えてしまひます。其れに小さい時分から覺えたのは、アクセントが正しうございます。」と、洪さんは傍らから口を出した。

霧の中に現はれた鍊光亭は、いつの間にかもう右手に聳えてゐた。近よつて見ると、



Accent

大 同 江 鍊 光 亭

遠望した時に想像した程の古色は認められないが、とにかく大同江畔に缺くことの出来ぬ趣味のある建物で、殊に「第一江山」といふ扁額の金文字があざやかに人の眼を射た。

「おやく、あの古びた建物にガラス障子が嵌めてあるのは變ですわ。」と、余は驚いて目を瞠つた。洪さんの目も怪しく光つたが、何とも云はなかつた。

「今は郵便局長の官舎になつて居るのです。」と、支局長は答へた。

「此の鍊光亭がですか。」

「さうです。すぐ此の鍊光亭に接して建てられたあの木造の粗末な洋館が郵便局ですからな。」と、支局長は笑つた。

余は其のガラス障子をはめて、白い窓掛を掛けて、此の鍊光亭の中に住まつて居る郵便局長や、其の家族を考へずには居られなかつた。彼等は嗜き好んで此處に住まつて居るのであらうか。恐らくさういふ譯ではあるまい。軍隊が進んで或る城市を占領した時に、大きな公の建物は取敢へず其の舎營に當てられる。察するに、日清、日露兩戦時の慌たゞしい面影が、今猶ほ改變される機會を見出さずに今日に至つたものであらう。火事の立退人を收容した寺の本堂に、襦袢が下つて居ると同格と考へれば、寧ろ其處に一種の哀れが見出だされなくてもない。唯だ願はくは、一日も早く、郵便局長をして住宅らしき住宅に住まはしめ、同

時に鍊光亭をして其の本來の面目を保たしめたいものである。こんな事を考へつゝある間に、船はやがて鍊光亭の下を過ぎ去らうとした。其の時、

「ガラス障子の問題で、つい忘れてゐましたが……。」

と、支局長は突然、亭下の崖の中腹に在る祠ほくらを指して、思ひ出したやうに斯う云つた。「あれが大同江祠と言つて、一人の烈女を祭つた祠だといふことです。尤も同じやうな傳説が晋州にもあつて、何方が本家だか判りませんが、兎に角其の物語といふのは斯うです。やはり文祿の役の時、小西行長の部將の某といふが、桂月香といふ女と、此の鍊光亭に登つて江水を眺めてゐると、其の女は此の武將を殺すことが、

邦家の讎を報ずる所以だと信じ、隙を窺つて、其の武將を崖下に突き落とし、自分も亦身を投じて死んだ、其の氣節を尊んで、祠として祭つたと、斯ういふのであつたね、洪さん。」

「さういふ傳説もあるが、其れに似た事は文祿の役當時に澤山あつた。此の大同江祠といふのは、何か他のものを祭つてあつたのに、後人がさういふ口碑を附會したものだらう。」と、洪さんは重きを置かぬやうな口吻であつた。余は事實と否とを問はず、彼の「第一江山」の欄下にかやうな物語をもつ小祠のあることを、寧ろ満足に思つた。

大同門は鍊光亭よりも一層高く峙つて堂々たる雄姿を見せてゐた。其の下を過ぎると右岸の人家は次第に其の

數條の楊柳が烟
るが如く暮靄の
中に隠見する。

屋根の形を變へて、棟にカーヴを見ることが少なくなつて
來た。これは朝鮮町が日本町に移り變はつたことを示す
ので、此の邊は、もう新市街の特色をあざやかに見せて居る。
支局長は靄の中に遙かに水を隔てた左岸を指して、「あそこ
が船橋里で、大島旅團が牽制運動を試みる爲め、幾度も強襲
を企て、多くの死傷者を出した所です。」と言つた。其處に
は數條の楊柳が烟るが如く暮靄の中に隠見して、平和な別
天地を爲して居た。「あの楊柳の間に幽かに見えるのが記
念碑です。お見えになりますか。」と、支局長は念を推した。
成程さう言はれ、ば、記念碑らしいものが見える。そして
二三人を乗せた一隻の韓船が今其の岸を離れて、此方を指

して漕ぎつゝある。これ亦平和な村落の一光景である。

「あそこは渡場になつてゐるのですか。」

「さうです。」

と支局長は答へた。我等の船も、其の渡場の片方の船着場
となつて居る税關官舎の横に着いた。船を捨て、江岸に
立つた時、後ろなる朝鮮人の船頭は、

「私は九曜館にゐるものです。電話がありますから、何時
でも御用の時は掛けて下さい。私の名ですか、岩吉といひ
ます。」と言つた。

一四 清正公と紀文大盡

幸田露伴

文學者
文學博士
名は成行
東京の人
慶應三年生

幸田露伴

一同は少時沈黙してゐた。

多勢に促されて口を開いた。

耳を欷てた。

加藤清正
豊臣徳川時代の
武將
熊本城主
尾張の人
慶長十六年歿
年五十

番茶會での事である。柳井君の談が濟んで、一同は少時沈黙して居たが、檜隈君は多勢に促されて、少し笑ひながら、「それでは、僕は一問題を提出して諸君の談話の種子としよう。」

と云つて、徐ろに其の重い口を開いた。人々は此の人何を語り出すかと、楽しんで耳を欷てた。

檜隈君は急がず慌てず語り出した。

「諸君、僕は一つの疑問を諸君に提出しようと思ふ。僕は、此の間、清正公せいしやうこう即ち加藤清正公の事を書いたものを讀んで見たが、其の中に僕をして感ぜしめ、又僕をして疑はしめ

太閤殿下の御知遇を蒙つて今日あるを致した。



幸田露伴

た事があつたのだ。それは何かといふと、斯ういふことなのである。清正公が既に大名に成り得た後のことであるが、一日其の臣下等に閑話をなされた折、予は民間の一賤夫より身を起こし、太閤殿下の御知遇を蒙つて、今日あるを致し得たが、よく予を知らぬものは、これを以て仕合せが好き故とのみ思ふて有らう。併し予は今にもあれ、家隸いんのこ郎黨も無く、朋友も無く、家財器物も何も有たぬ、素裸な下帯一つの身となつても、我が器量だけの事をば仕出し得ると思ふ。」と物語られたので、臣下等が「如何に勇

一時の座興に虚言詐瞞を云うたのではない。

兎角の詮議も無し。

武の我が君でも、下帯一つの身となり給ひては、如何とも詮方無く困じ果て給ふべし。」と訝り問うたところ、「イヤ全く予は一時の座興に虚言詐瞞を云うたのではない。」と答へられ



加藤清正

た。そこで「それならば如何にか爲し給ふ。」と畏るゝ詰り氣味に尋ねると「さればである。若しも全くの素裸にて、何處かに抛り出されたものとするれば、予は先づ風呂屋を見出だして其の許に入り立たんと思ふなり。いづく如何なる所にも、人里ある以上は風呂屋無きことなければ、風呂屋に立ち寄りて、兎角の詮議も無く、先づ其の風呂屋

何くれと用事を爲す。

陰陽なく打振舞ふ。

の爲めに、或は水を汲み、或は薪を運び、又は打割り、或は風呂場の流しを洗ひ、桶を洗ふといふやうに、何くれとなく目に当たりたる用事を爲しやるべし。風呂屋なんぞにてのことなれば、素裸も苦しからず、働けば身内の温熱も起こりて徒居よりは増しなり。

又さする時は、たとひ召抱へて奉公人と爲



清正の幟

さざるまでも、一飯を呉れざるほどの事は有るべからず。まして此方の望みを少なくし、働きを宜しくし、正直に陰陽なく打振舞はんには、人を使ふものは常に宜しき人を使はんと思ひ居るものゆゑ、召抱へずといふこと有るべからず。

たゞ此方の心掛だに宜しく、働きさへ甲斐々々しければ、おのづと飯を食ふほどの途は開くべし。さて試みに使はるるにせよ、身を寄するところを得れば、二三日は素裸にても有るべし、三四日も過ぎて忠實なる心ざまを見知られんには、如何に吝しほき主人にても、古單衣の破れ果てたるもの一つ位は呉れざること有るべからず。既に身を被ふものをだに得れば、又如何やうにも主取を爲すを得べく、次第々々に身を立て、奉公人一人前として羞かしからぬ衣服を得れば、少々の給金なりとも積み貯へ、奈良刀の脇差一本を買ひ取るべし。此の奈良刀の一本を買ひ取るところまでは辛苦一方ならざるべきも、脇差一本を吾が手に入るゝを得た

腕骨次第に吾が運命を切り開く。

らんには、それより後は、男兒一人なり、腕骨次第に吾が運命を切り開いて、雑兵より端侍はしたまじらひ、それよりして百貫千貫の身ともなり、天の冥加にさへ叶はゞ、遂に一國一城の主ともなるべし。と語られたので、一同夢の覺めたるが如く、如何にも御道理にして世の實際に外れぬ御話なり。と感服したといふことである。

僕の今饒舌しやべつた言葉と本文とは違ふかも知らぬが、さういふ意味の事が書いて有つたのだ。ところで、僕の疑ふといふのは、其處の段であつて、其の清正公の談は非常に好い教訓であるとは感ずるが、扱それを單に書物の上の事のみとしないで、直ちに之れを我輩等の身の上に引き移して見

どうも合點の行き兼ねる。

ると、昔と今との差は有るに相違ないが、どうも合點の行き兼ねるところがある。といふのは、今すぐに僕が素裸で飛び出したとすれば、さう清正公のやうに、立身する徑路が分明には見えて來ないからね。諸君はどう思ふか知らないが、實際清正公の言は徹底して居る好い言のやうにも思へるが、しかし僕等の今の身に當て嵌めると不都合を免れない。素裸で無いまでも、着のみ着のまゝで出たのでは、僕にはどうも世に立つて行くことが出来るやうな氣はせぬから、これは時勢の差で、出來ない相談なのかとも思ふ。諸君の中、誰れか此の清正公の言葉のやうな事を、今日の世態でも爲し得ると思ふ人がありますか。誰れか清正公のやう

出來ない相談。

に身を立つる徑路を分明に見得て居る人がありますか。」と云つた。

此の「清正公のやうに能く爲し得るものが有るか。」との間には、皆沈黙させられて仕舞つた。敢て能く爲し得るといふ事は誰れにも一寸出來難いからである。併し松山君は黙り通しは仕なかつた。

「それは君、僕等は今直と立派な答へは出來ないさ。けれども僕が思ふには、それは清正公の言に無理が有るのでは無くて、僕等が實は清正公だけ偉くないから、それで答を見出だし得ないのだらうと思ふ。何も戦亂の世と治平の世との時勢の差によつてのみ難易があるといふのでは有る

戦亂の世と治平の世と。

紀文大盡
徳川時代の豪商
紀國屋文左衛門
享保十九年歿
年六十六

無心を言ひ込
む。
與ふることを肯
んじない。

手腕の有るもの
ならば、四文の
錢からでも取り
付ける。

まいよ。それに就いては、僕も思ひ出した話が有るが、これは治平の世の事である。彼の有名な紀國屋文左衛門に對つて、或る男が度々無心を言ひ込んだのである。紀文は其の度毎に快く金子を與へたが、餘り度々なので、終には與へることを肯んじないで、「お前は商賣の資本々々と云ふから度々貸して進まぜたが、何時になつても其の商賣の成立たないのは困つた人である。手腕の有るものならば、四文の錢からでも取り付ける」と云ひ傳へて居るではないか。今ここに四文あるから、これをお前に進まげるであらう。これを取りついで立派な商人になれるが宜しい」と云つたといふことである。すると其の男が顔を膨らして、「四文ではど

うすることも出来ませぬ、お前さんでも仕方がありますまい、さあどうすれば宜しいのです。」と詰り問うた。その時、紀文は笑つて、「それなら教へてあげようが、其の四文でまづ飴を買ひなさい。そしてその飴を桶屋の子供に與つて巧く機嫌を取つて、そして竹の屑を貰ひ、小刀を借り、斯様々といふものを造つて子供に賣るがよい。」と教へた。其品モノが簡易飛行機とでも云ふべき彼の竹蜻蛉といふ玩具だといふこととで、此の忠告に従ひ、其の男は、竹蜻蛉から取りついて、それから米俵のサンダラポッチを買つて、錢カネ縉シをつくり、莎ワサを造り、零米コシラヘを集め、次第々々に廢物利用に着眼して、鰻上りに身代をこしらへたといふことを聞いてゐる。だから、僕等も

鰻上りに身代を
こしらへる。

紀文のやうに智慧が有れば、治平の世の今日でも、清正公のやうに出世が出来るに相違ないと思ふ。 どうだらう諸君、僕の説は間違つては居まい。」と云つた。

(番茶會談)

一五 悔いて食はず

二宮翁が櫻町の陣屋にありし頃、出入の疊職人に源吉といふ者ありき。口を能く利き、才ありといへども、遊惰なれば常に貧乏せり。年末に及んで、翁の許に來り、餅米の借用を乞ふ。翁曰はく、「汝の如くいつも家業を怠る者が正月なればとて、年中勉強したる者と同様に餅を食はんとするは

二宮翁
經濟家
名は尊徳
通稱金次郎
小田原の人
安政三年歿
年七十
櫻町
下野國芳賀郡

正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝ物にあらず。



二宮尊徳木像

心得違なり。正月は不意に來るものにあらず、米も偶然に得らるゝものにあらず。正月は三百六十日あけくれして來り、米は春耕し、夏耘り、秋刈りて、始めて得らる。汝は春耕さず、夏耘らず、秋刈らず、米なきは當前の事なり。されば正月なりとも餅を食ふ道理あるべからず。今貸すともいかにして返さんや。借りて返す道なき時は、罪人となるべし。正月に餅が食ひたくは、今日より遊惰の習ひを改め、山林に入

りて落葉を搔き、肥を拵へ、來年、田を作り、米を得て、來々年の正月、餅を食ふべきなり。まづ來年の正月は己が過を悔いて餅を食ふことを止めよ。」と懇ろに説諭せられたり。

源吉大きに先非を悔い、遊惰にして家業を怠りながら、年中勉強する人と同様に、餅を食ひて春を迎へんと思へるは、

一心為供養是名謂思忘
一心為清濁是名謂迷悟
一心為輕重是名謂虛實

尊德筆蹟

全く心得違なりき。この度は餅を食はず、過を悔

いて年を取り、年明けなば、二日より家業を始め、刻苦して、來年の正月は、人並に餅を搗きて祝ひ申すべし。」といひ、厚くその教訓を謝して門を出づ。

一 心為往來是名謂思忘
 一 心為清濁是名謂迷悟
 一 心為輕重是名謂虛實

しをくとして出で行く。

生れ替はりたるが如し。

翁は源吉がしをくとして出で行くを見て、俄に呼び戻して曰はく、「余が教訓能く腹に入りたるか。」源吉曰はく、「誠に恐れ入りたり。生涯忘れずして勉強すべし。」翁乃ち白米一俵、餅米一俵、金一兩に大根、芋等を添へて與へらる。これより源吉は生れ替はりたるが如くなりて生涯を終へたりといふ。

【二宮翁夜話】

一六 熊の話

相馬御風

相馬御風
 文學者
 名は昌治
 越後糸魚川の人
 明治十六年生

面白い話もあればあるものである。今年の上旬の事であつた。福島縣の山奥、海拔二千

モモンガア
鼯鼠(むささび)

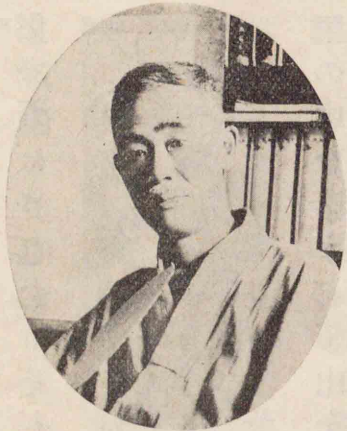
尺位の高地に五十戸程の村がある。昔から猿や熊が捕れるので名高いところであるが、或日、その村の一人の獵師が一疋の犬を連れて、夕方からモモンガア狩に出かけた。モモンガアといふ獸は、月夜に出たところをとるもので、何でも四肢に張つてゐる膜をはたらかして木から木へ、風のやうにフワリくと飛び移つて行くのを、犬に追はせて、撃つのだといふことである。

さて其の獵師は、そのモモンガアをさがして、夕暮の薄暗がりの山中を段々に登つて行つたが、まださう高くも登らない中に、先に立つた犬が急にけたましく吠え出した。獵師は不審に思つた。「こんな淺い山にろくな獲物の居る

犬がけたましく吠え出した。

高が兎か狸位。

筈がない。高が兎か狸位であらう。それにしても吠え方が變だ、一體何が居るのだらう。」と、彼れはあつさりといふ事考へながら、犬のゐる方へ近寄つた。



相馬御風

もう大分暗くなつてゐたので、よくはわからなかつたが、彼れはそこに穴があるやうな氣がした。そして犬がその穴の入口をのぞいて吠えてゐるらしく思はれた。「ははあ、こいつは狸だな。」彼れはこんな獨語をいひながら、犬を制しつゝ、その穴らしい所を覗いて見た。その瞬間に、穴の中から大きな熊が飛び出して來て、いき

瀕死の重傷を負ふ。

大そらを静かにし
ろき雲はゆくしづ
かにわれも生くべ
くありけり

御風

全身血塗れにな
る。

獵師だけは辛う
じて蘇生した。

なり獵師に抱きついた。此の餘りに思ひがけぬ突撃の爲めに、獵師はつひに鐵砲をも山刀をも使ふことが出来なかつた。又犬の奮闘もその甲斐なくして、人も犬も瀕死の重傷を負はされた。そして重傷を負うた主人と犬とは、深い

大そらを静かにし
ろき雲はゆくしづ
かにわれも生くべ
くありけり

讀筆風御

雪の中を辛うじて山を下りたが、我が家の戸口まで辿りついた時には、いづれも全身血塗れになつてゐて、やがて人事不省になつた。

やがて迎へ取つた家人達の介抱によつて、獵師だけは辛

が、犬はつひに
再び起つことが
出来なかつた。
おぼろげながら
語られた一部始
終。

見事に復讐をと
けた。

思ひがけぬ景
品。

うじて蘇生したが、犬はつひに再び起つ事が出来なかつた。しかし蘇生した獵師の口から、おぼろげながら語られた一部始終によつて、村人達は一齊に奮起した。

やがて翌朝未明に熊狩の團體が組織された。道しるべは人と犬との血潮の痕で、彼等はやがて熊の潜んでゐる穴の口を包圍することが出来た。そして難なく熊を討ち取つて、見事に復讐を遂げた。それから村人は萬歳を三唱して威勢よく引上げようとしたが、ふと熊の居た穴の入口に何か小さな生き物のピク／＼と動いて居るのを見出だした。よく見ると、それは生れたばかりの小さな二匹の熊の子であつた。人々は思ひがけぬ景品を得て、再び勝鬨を上

時ならぬお祭騒
ぎにどよめい
た。

げた。

死んだ親熊と生きてゐる子熊とは、やがて傷ついた獵師の家へと運ばれた。村は時ならぬお祭騒ぎにどよめいた。それから悲壯な復讐の歡びについて、熊を賣つた後の樂しみについて、村人達は威勢よく語り合ひながら、獲物の周圍に集つて痛飲し亂舞した。傷を負うた獵師は、此の時既に町の醫院に運ばれてゐたのである。

此の賑やかなお祭騒ぎの眞最中に、人々は思ひがけなく異様の聲を聞いた。それは生捕にして來た子熊の啼き聲であつた。生れたばかりの、まだ目もあかず、毛もろくに生えてゐない二匹の子熊が、その時始めて啼き聲を立てたの

である、しかも其の聲は何ともいひやうのない悲しい聲であつたのである。

勝ち誇つてゐた村人達は、その悲しい啼き聲によつて、始めて注意して子熊を見た。彼等は熊といふものが、非常の場合には、いつでも胎兒を生み落して身輕になり得る本能を持つてゐることを知つてゐた。

「こりやきつと月足らずの子だらうぜ。」

かういふ言葉が同時に人々の口から叫ばれた。

そしてすぐあとから、

「かあいさうに！」

といふ嘆聲も人々の口を洩れた。

嘆聲も人々の口
を洩れた。

今迄はしやいで
る人々も、こ
の光景を見ては
さすがに濕つた
心地にならずに
居られなかつ
た。

家の中の温かさが加はるにつれて、熊の子はだん／＼元
氣を増して來た。そしてピク／＼動いてはしきりに啼い
てゐる、その傍らには、血まみれになつた親熊が死骸となつ
て横たはつてゐるのであつた。

今迄はしやいでゐた人々も、この光景を見ては、さすがに
濕つた心地にならずに居られなかつた。

「かあいさうに！」

「ほんとに、かあいさうに！」

あちこちから同じ嘆息がつぎ／＼に繰返された。しま
ひには、そのぶよ／＼した熊の子を抱き上げて、懷に入れて、
温めてやらうとする者さへ出て來た。

赤子をかへた
二三人の女が出
て來て、其の中
の一人が、我が
兒を人に託して
手早く熊の子を
抱き上げた。

「おい、誰れか、乳の出る女子は居ないか。」

誰れかがこんなことを云ひ出すと、聲に應じて赤子をか
かへた二三人の女が出て來て、其の中の一人がわが兒を人
に託けて、手早く熊の子を抱き上げた。そしてさらに氣味
わるさうな様子もなく、その熊の子に乳房をふくませた。
しかし熊の子はまだ乳房をくはへることすら知らなかつ
た。女が變はり、乳房が變はつても、やはり駄目であつた。
人々は失望した。そしてせめて温めてだけでもやらう
といふので、圍爐裡の傍に、藁の寢床を作り、その中へ二匹の
熊の子を入れて、代はる／＼手を温めては撫でてやつた。
かうして一旦復讎に勝ち誇つてゐた村人達が、いつしか

自分達の爲めに親無しとなつた二匹のあはれな子熊をいたはり育てる爲めに我を忘れて働く人々となつてゐた。話の概略おぼえはこれで、東北の知人が手紙で知らせてくれたものであるが、何といふ美しい、原始的な、そして意味の深い話であらう。

面白い話もあればあるものである。

一七 北露の冬の美観

大庭 柯公

露西亞の建築で他の歐洲人を驚かすものは壁の厚さであらう。一間位の厚さの壁は珍らしくもないが、少し上等

大庭柯公
大阪朝日新聞記者
長州の人
大正十四年歿
年五十二

Odessa
露國黒海岸の港
市

の建築になると、一間半乃至二間位のものもある。勿論これは冬の嚴しい寒氣を防ぐ爲めの目的で造られたものであるが、南方特にオデッサ邊、若しくは黒海沿岸一帯の溫地へ行つても、亦壁の随分と厚いのを目撃する。元來寒さを防ぐ爲めの壁は、同時に又暑さを防ぐためのものであるから、露國の南北を通じて壁の厚いのは、畢竟寒暑共に烈しいことを證據立てゝ居るのである。然らば露西亞人は寒さに強いが、暑さに強いかと云ふと、寒さにも暑さにも弱いといふのは不思議な事實である。

冬に入つてから攝氏氷點下十五度にもなると、地方によつては、午砲と同じ様な砲を放つ處もある。お寺でゴーン、

ゴーンと鐘を鳴らし始める處もある。さういふ日には、十歳以下の學齡兒童の通學が絶対に禁止される。大人にいても、一寸帽子なしに戸外へ出ると、すぐに頭から風を引く



大 庭 公 柯

屋内でも靴下を脱ぐと、足から風を引くと云つては大騒ぎをする。かういふ恐怖はいづれも多年の経験から來たので、彼等は凍傷といふものを非常に怖ろしく思つて居る。凍傷で兩脚や片足を失つた不具者の露西亞ほど多い國は、他にはあるまい。今度の戦争でも、一九一四年から翌年へかけての冬季中、對獨軍の戦線に於

北部露西亞の壯觀は、どうしても冬にある。單に露都の冬を見ても、ネヴァ河の結氷季節は、他に類のない美觀である。
Neva R.
露國西北部レニ
ングラードを貫
流す。

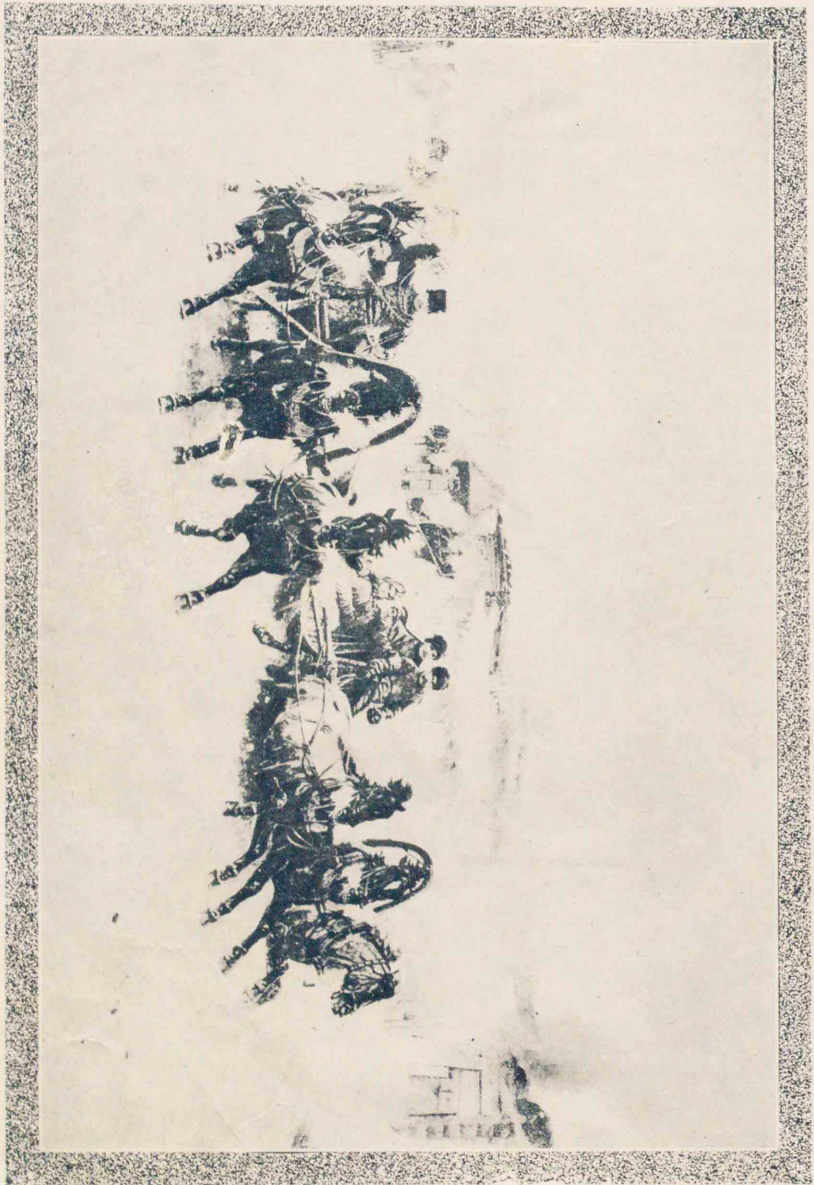
ける軍隊内の凍傷患者の數は夥しいものであつた。これは私が當時同方面の傷病兵輸送係の役を勤めた露國の二等軍醫正から聞いた話であるが、負傷後の彼等は、多く四肢の凍傷を起こし、切り落された手と足とが夥しく積もつてゐて、何處の病院でもその處分に困つたといふことである。寒氣は恐るべきものではあるが、しかしながら北部露西亞の壯觀は、どうしても冬にある。單に露都の冬を見ても、ネヴァ河の結氷季節は、他に類のない美觀である。結氷の厚さが一間以上になると、河上を人馬の通行する事を許すので、鐵橋以外に、氷上にも自然の通路が開かれ、夜間はその通路に二列の電燈が點ぜられる。隅田川を二倍半にした

ネヴァ河の結氷中に於ける壯觀の一つは貯藏氷切取りの光景である。

位の幅の川が一面に結氷して、煌々たる幾百の電燈がキラキラと光つてゐる光景は、さながら水晶宮の趣である。ネヴァ河の結氷中に於ける壯觀の一つは貯藏氷切取りの光景である。日本では昔函館の五稜廓で貯藏氷を切り出したが、露都では到るところ氷が無盡藏であるだけに、龍紋などいふ専門の氷屋がなく、大小のホテルや料理屋などは、皆銘々にネヴァ河の氷を切り取つて、荷馬車へ積んで來るのである。

氷滑りは、北部露西亞の、冬期に於ける唯一の戶外運動と云つてもよい。

氷滑りは、北部露西亞の、冬期に於ける唯一の戶外運動と云つてもよい。スキ一の遊技もやらぬではないが、これは市街を離れた、廣い場所を必要とするので、市民が市中での



(走馬カイト) ヴーボスの冬の露北

冬の話の序に、もう一つ逸すべからざるは、露人が冬外套に金をかけることである。貴獣の毛皮は、露西亞では一種の世襲的財産となつて居る。

遊技は、やはり氷滑りに限られて居る。學校が仕舞になると、男女の學生は四時か五時頃から、そして若夫婦や獨身者などは晩飯をすましてから、氷滑器をぶら提げて續々と一定のスケートへと出かけて行く。煌々たるアーク燈の下で、多數の男女が、スケートで音楽入りの氷滑りをやつてをるところを見ると、老人臭い吾々日本人でも一寸やつて見たくなる位である。

冬の話の序に、もう一つ逸すべからざるは、露人が冬外套に金をかける事である。貴獣の毛皮は、露西亞では一種の世襲的財産となつて居る。上流社會では、男女共に外套の裏に萬金をかける事は珍らしくないが、農民等の間に於い

ても、一着七八十留位ルイの毛皮を財産の主要品として居るのが珍しくない。支那では一狐裘三十年などと云つて居るが、露人の毛皮に對する保存期間は、決して三十年や四十年ではなくして、二代三代と世襲するのである。寒さを怖れる露人は暑さにも弱い。左程烈しくない露都の夏にも、中流以上の市民はそれぐ、皆避暑に出かける。避暑地は大概芬蘭フィンランドの海岸地方ときまつて居る。夏日本へやつて來た露西亞人が、暑さに驚いて碌々見物もせず、歸つてしまふのも偶然ではない。

『露國及露人研究』の文に據る。

一八 仙崖和尚

仙崖和尚
筑前博多の聖福
寺の住僧
美濃の人
天保八年寂

まづ畫が面白い。
それから書が面白。
文句と、三拍子
調和して、この
和尚の不思議な
面目を現はして
居る所が、殊に
面白い。

三月の十日である。上野の美術協會へ行つて仙崖和尚の遺墨展覽會を見た。數百點といふ夥しい出品があつて、和尚の作の殆んど全部を網羅して居るといふことであるが、その面白いことと云つたら、ない。まづ畫が面白い。それから書が面白い、文句が面白い。畫と書と文句と、三拍子調和して、この和尚の不思議な面目を現はして居る所が、殊に面白い。この和尚の閱歴や、禪僧としての境涯などは、私の殆んど知らぬ所であるが、書畫や文句に現はれた飄逸味、幽玄味、それから佛も悪魔も、珠も瓦も一しよくたにして居る中に、温かい諷刺教訓の面白くあらはれて居る工合は何とも云はれぬものであつた。

阿呆がボカンとして、月を眺めてゐる。

月のみか我が命もまた天にあり。

また同じやうな晝に、

あの月が落ちたらおれが拾ひましょ。



誰以信頭
居る心
漁味各別
分一安富

筆尚和崖仙

こんな風だ。繪と字と句との調和した間に現はれた微妙な味だから、何ともしやうがない。

大黒様が俵の上に坐つて居る。上に句がある。

高うても賣つてはならぬ二俵切。

明治ッ兒、大正ッ兒のために書いたやうだ。

恵比須様が鯛を釣つて居る。

足る事を知つたればこそ福の神

二匹鯛つるえびすなければ。

大きな一匹の鯛に於いて、一生の食物を釣つて居る心、天下を釣つて居る心が、其のこく顔に溢れて居る。

目のわるい男が空を仰いで居る。空には月がある。一つの月である。

あの月の二つ見ゆるは月の病。

みんな月がわるいのだ。向うがわるいのだ。自分のである。百年前の人の心は、やはり百年後の人の心である。

大きな一匹の鯛に於いて、一生の食物を釣つて居る心、天下を釣つて居る心が、其のこく顔に溢れて居る。

利休の像がある。替はたゞ六字。

吾茶天下人了。

虎の畫には

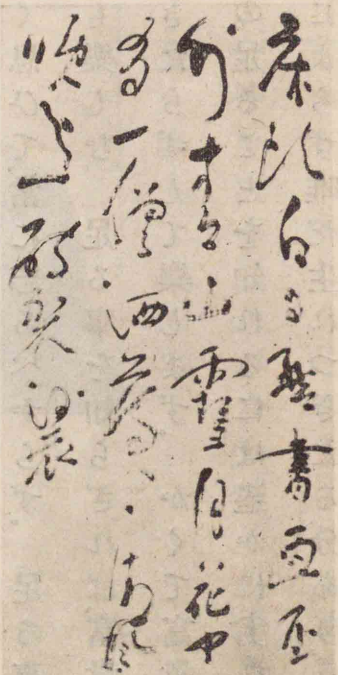
猫か虎かあてゝ見ろ。

ろくでもない事を平氣で書いたのも大分ある。そしてそれを悉くろくにして居るから面白い。

父死子死孫死。

これはさる有徳人たじから、正月の床掛にと云つて、芽出度い文句を所望された時に、書いて與へたのだといふことである。頼んだ者が眉をひそめると、「何いゝぢやないか、子が先に死んで親が残るのは倒れ事不吉だが、父が死んで、それから

床頭白日琴書畫。
屋外青山雪月花。
中有二僧洒落々々。
清風晚上破袈裟。



仙 崖 和 尚 筆

子が死んで、それから孫が死ぬる、かう順當に行けば文句があるまい。」と和尚が云つたので、一倍

悦ばれて、其の家の寶物になつたのだといふことである。

外にもこんなのが澤山ある。中には落ち切つた話に無上深奥の意義を寓したのも少なくない。

和尚の作は、字も、畫も、文句も、卑近である、枯れ切つて居る。そしてその中に高遠の風致がある、複雑な味はひが籠つて居る、奥深い花やかさがある。至り高き人格

和尚の作は、字も、畫も、文句も、卑近である、簡單である、枯れ切つて居る。

の求めずして現はれた結果であらう。

(雲來去)

一九 清 福

貝 原 益 軒

貝原益軒
江戸時代の學者
名は篤信
筑前の人
正徳四年歿
年八十五

我が身の足る事
を知りて、分に
安んずる人まれ
なり。是れ分外
を願ふによりて
樂しみを失へり。

我が身の足る事を知りて、分に安んずる人まれなり。多くは分外を願ふによりて樂しみを失へり。知足の理をよく思ひて、常に忘るべからず。足る事を知れば、貧賤にしても樂しむ。足る事を知らざれば、富貴を極むれども猶ほあきたらずして樂しまず。かくて富貴ならんは、貧賤なる人の足ることを知れるには遙かに劣れり。富貴貧賤は賢愚によらず、唯だ生れつきたる分あり。賢者も貧しく、不肖者

も富める人多し。是れ生れつきたる分なり。分に安んじて、分外を羨み願ふべからず。外を願ふ人は樂しみをなくして憂へ多し。禍も亦これよりおこる。愚かなりと云ふべ



貝 原 益 軒

し。世には福さいはひわれ程もなき人多し。我れよりも下しもなる人を見て、足る事を知り、分に安んじ、外を願はざれば、憂へなく、樂しみ多くして禍なし。又極めて貧しき人も、

人各々生れつきたる分ある事を知りて、分に安んじて、天をうらみ人をとがむべからず。富貴なればおごり易くして此の樂しみを得がたし。貧

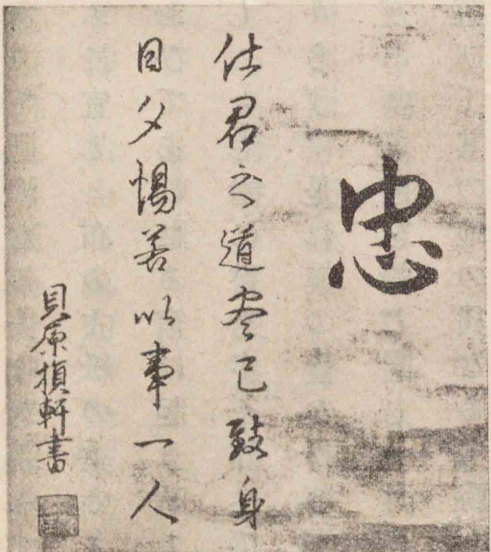
富貴の人は世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂しむことを知らず。

貧しきは富めるにまされり。讀書は貧者の樂しみ。

賤の人は怠り少なくしてさとし易し。富貴の人は世のはかなきわざ多きに迷ひて、書を讀んで道を樂しむことを知らず。然れば富貴なるはかへつて不幸といふべし。此の大いなる樂しみを得難ければなり。古語に貧しきは富めるにまされりといひ、又讀書は貧者の樂しみといへるもむべなり。我がともがら愚かにして又いやしければ、塵ひぢの數にもあらぬ身なれど、書を讀み道をたふとぶ樂しみは、いかなる富貴にもかへ難し。
清福といふ事あり。樂しみを好める人必ず之れを知るべし。是れ識者の樂しむ所にして、俗人は知らず。此の故に我が身に清福を得て大いなる幸あれども、これを知りて

其の身安く靜かにして、心に憂へなき、是れなん清福とぞいふめる。

忠
仕君之道盡己致
身、日夕惕若、以
事一人。
貝原損軒書



なる福にはあらず。貧賤にして時にあはずとも、其の身安く靜かにして心に憂へなき、是れなん清福とぞいふめる。いとまありて閑かに書を讀み古の道を楽しむは、是れ清福のいと大いなる樂しみなり。また其の心風雅にして、古書を讀み、詩歌を吟じ、月花をめで、山水を好み、四時のおしうつる折

良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。

折の美景と、草木のかはるぐ、榮えうるはしきを見て樂しみ、貧しけれど飢寒の憂へなく、蔬食口に馴れぬれば味はひありて、肥濃なる美味を羨まず、淡薄なるはかへつて身を養ふに宜し。布の衣、紙の衾、いさゝか寒を防ぐに足れり。葎おひてあれたる宿に起き臥しても、風雨のうれへなかるべし。もし幸に書を多く貯へて架にさしばさまば、貧とすべからず。是れ眞の寶なれば、滿籛の金にまされり。また良友ありて道を論じ、同じく月花を賞して樂しみ、名區佳境に遊びて、其の地の異なる形勝を弄ぶ。是れ皆清福を得たるなり。いかなる縁ありてかかゝる福をうくるは、富貴の驕樂にまさりて幸甚だし。

〔樂訓〕

二〇名君

菊池寛

菊池寛
小説家
高松市の人
明治二十二年生
將軍家茂
安政五年將軍宣
下
慶應二年歿
年二十一

雲と書き始めた文句が雨とならないうちに、筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書く。

十四代將軍家茂公は、先刻から悪戯ばかりして居る。戸川播磨守が懸命に書いた千字文の中の「雲騰致雨、露結爲霜」といふ楷書の立派なお手本の方などは見向きもしないで、奉書のお草紙の上に、やたらに筆をのたくらせて居る。雲と書き始めた文句が雨とならないうちに筆がのたくつて、龍のやうな滅茶苦茶な曲線を幾つも書いて居る。一番最初の雲といふ字でさへまだはつきりとした形を成して居ない。まして騰ると云つたやうな難しい字は、まるで書く

志がないらしい。雲の形が中途から崩れ出して、雲中の龍のやうな出鱈目な曲線になつてしまふのである。そして時々眼がお草紙から離れて、傍の金蒔繪の火鉢の方に移つて行く。が、その火鉢の手觸りの柔かさうな灰に立てられて居る線香は、まだ半分もたつて居ない。それを見るときは、よく退屈し始めた十四代將軍は、二間ばかり下座に畏まつて居るお氣に入りの小姓の一人に、目顔で笑ひかけて見る。が、小姓が案外真面目くさつて居るので、また仕方なしにお草紙に雲と書き始める。が、雲はいつまで経つても混沌としたまゝである。雲と書き始めた筆が自由に活潑に紙の上を無意味に一巡すると、家茂公は手荒く新しい紙を

目顔で笑ひかけて居る。
真面目くさつて居る。

線香がなか／＼た、ないと見てとつた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとして居る。

戸川安清

安政六年家茂の傳准小姓組番頭となる、時に年七十
慶應四年歿年八十二

めくる。先刻から何枚真新しい御献上物の奉書が無駄にしたか知れない。奉書のお草紙は十五枚綴ぢになつてゐる。線香の方は兎も角もお草紙の方さへ片が附けばその日のお稽古は終はつたことになるのだ。線香がなか／＼たゝないと見て取つた家茂公は、今度は非常手段に出て、お草紙の方をなすり潰さうとして居るのである。

戸川播磨守安清は默然として家茂公の亂行を見て居た。彼れが習字の御相手として召し出だされてから、まだ一月も経つて居ない。片假名やいろは假名のお稽古が濟んで、漢字のお習字に移ることになつて、彼れは御相手として特に召し出だされたのである。林家の人々などを差越えて

のかうした沙汰は、彼れとしては絶大な名譽であつた。彼れは老後の凡べてをお役目の爲めに盡くさうとして居る。そして將軍家の御手蹟を少しでもよくすれば此の上の御奉公はないと思つて居る。

處が、肝腎の家茂公は、彼れが手を執つて教へ始めてから、一字一畫も眞面目に書いたことがない。いろは假名の稽古の御相手が、大奥の中藹であつた爲めだらう、習字と云へばたゞ悪戯わるまじをして時間を潰しさへすればいゝと思つて居るらしい。

幼少の折から嚴しい師に就いて一點一畫も忽せにしないやうにと教へられた播磨守は、書道に對して可なり敬度

播磨守は書道に對して可なり敬

度な心持を懐いてゐる。

家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。御不興を蒙る。

な心持を懐いて居る。彼れは口を漱すすいで、手を淨めた後でなければ筆を執つたことさへない。それなのに、家茂公は彼れの面前で悪戯わるまじばかりしてゐる。書を書くことの尊たよさを少しも知つて居られない。慰み事か、弄あそび事か、何かのやうに書を瀆して居る。家茂公の爲すことがすべて播磨守の心を痛めた。七十を三つも越して居る一徹な播磨守の心を痛めた。彼れは、どうにかして主君のかうした心掛を矯なまさなければならぬと思つた。その爲めには縦令御不興を蒙らうとも、お役御免にならうとも、厭ふところはないとまで思つて居た。お稽古の日が重なるに連れて彼れの決心は愈々堅くなつて來た。ところが今日は家茂公の悪わる

戯あそが何時もよりももつとひどい。一字だつて眞面目には書かれないのである。

白絹しろきぬのやうにつやくと光る奉書を、五六枚も無駄にして、更に幾枚目かの紙に出鱈目な曲線を書かれようとした時である。播磨守は無言のまゝ、家茂公の筆を持つた掌をキユツと握りしめた。家茂公ははッと本能的に駭かれたやうであるが、直ぐ子供ながらに自分の位置の優越を思ひ出されると、威壓的な烈しい目附で、播磨守の顔をぢッと見られた。が、播磨守はびくともしなかつた。彼れは柔かい小鳥のやうな生温い掌てを、意識して強く、少しは懲罰的に痛さを感じしめる位に強く握りしめながら、奉書の上に「雲騰

家茂公ははッと本能的に駭かれた。

播磨守はびくともしなかつた。

播磨守はいつかな放さなかつた。

致雨露結爲霜」と書かせた。家茂公は筋すぢばつた掌てで握りしめられる痛みに堪へかねて、途中で二三度振りほどかうとした。が、播磨守はいつかな放さなかつたが、その八字がすつかり書き了へられた時である、播磨守がその堅い把握の手を緩めて、ぢッと両手を膝に置きながら、公が書いたと云ふよりも、自分の書いた八字に眺め入つた時だつた。赤くなつた右の掌てのひらをぢつと見て居た家茂公は、机の上にあつた青磁の水入れを持つて立ち上がると、いきなりたッぷりと堪へられて居た水を、播磨守の白髪はくはつの頭あたまへざぶりとかけたまゝ、
「わあッはゝゝ、わあッはゝゝ」と笑ひながら、大奥の方へ走

り込まれたのである。

一徹な播磨守は主君から――幼少な年齢から来る悪戯であるとは云へ――烈しい侮辱を受けたので、頭から落ちる雫を拭ひもやらず、机に両手をかけたまゝ、暫らくは身動きもしないで考へ込んだ。

駭いて馳け寄つたお側衆の小出勢州は、懷紙を出して、播磨守の額から顎にかけて拭き下しながら、

「餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるとは云へ、餘りな御亂行ぢや。御主君とは云へ、心外で御座らう。拙者から御大老に申上げて、きつい御諫言を申上ぐることに致さう。御勘辨なされい。」と氣の毒さうに慰めた。

餘りなお悪戯ぢや。御幼少であるとは云へ、餘り御亂行ぢや。

播磨守は默然として勢州の拭くのに委せて居たが、濡れた上下の威儀を正すと、心持聲を落しながら、

「井伊侯に申上ぐるなど輕はずみな事をして下さるな。今日といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。」

井伊侯に申上ぐるなど輕はずみな事をして下さるな。今日といふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。

今日と云ふ今日は、上様の御仁慈のほどが骨身に徹へ申したわ。勢州殿有様は斯様で御座る。拙者今日はお机の前に坐つて以來頻りに小用を催したのを、ちツと辛抱致し居つたところ、老年の悲しさには、懸命にお手を執つた砌り、つい失念して尿を少々洩したので御座る。君前に於いてかかる大不敬を犯した事が、若し大目附の耳に入らうなら、謹慎閉門はおろか、切腹の御沙汰にも至らうかと、心も心ならず苦慮致し居つたのを、それとお察し遊ばした上様は、拙者

の失策を御自身の悪戯で掩ひかくして給はつたのぢや。御仁慈のほど骨身に徹し申したわ。」と播磨守は老いた兩眼に涙をひたくと堪へて居たのである。

小出勢州を始め並居る近習達は、あつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

その事があつてから、此の逸話は江戸城の隅から隅へと傳へられた。登城する大名の一人から一人へと傳へられた。皆が異口同音に名君家茂公の君徳を讃へぬ者はなかつた。たゞ之れを聞いた大老井伊直弼だけは、話を半分ほど聞くと眉をひそめながら、

まつとばかり膝を叩いて、家茂公の聰明な仁慈に感嘆の聲を上げたのである。

「お悪戯にも程のあつたものぢや。」と言つたまゝ、話手が家茂公を讃め上げるのを聞いても、にこりともしなかつた。

〔菊池寛短篇小説集〕

二一 大川の水

芥川龍之介

自分は、大川端に近い町に生れた。家を出て若葉に掩はれた、黒堀の多い横網の小路をぬけると、すぐあの幅の広い川筋の見渡される、百本杭の河岸へ出るのである。幼い時から、中學を卒業するまで、自分は殆んど毎日のやうに、あの川を見た。水と、船と、橋と、砂洲と、水の上に生れて水の上に暮らしてゐる慌たゞしい人々の生活とを見た。眞夏の日

芥川龍之介
文學者
俳號を我鬼といふ
東京京橋に生る
昭和二年
年三十六
大川端
隅田河岸

の午すぎ、燉けた砂を踏みながら、水泳を習ひに行く通りすがりに、嗅ぐともなく嗅いだ河の水のほひも、今では年と共に、親しく思ひ出されるやうな氣がする。

自分はどうして、かうもあの川を愛するのか、あのどちらかと言へば、泥濁りのした大川の生あたゝかい水に、限りない床しさを感ずるのか。自分ながらも、少しく、其の説明に苦しまずにはゐられない。唯だ、自分は、むかしからあの水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな、云ひがたい慰安と寂寥とを感じた。全く、自分の住んでゐる世界から遠ざかつて、なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。此の心もちの爲めに、此の慰安と寂寥とを味はひ

水を見る毎に、何となく、涙を落したいやうな、云ひがたい慰安と寂寥とを感じた。
なつかしい思慕と追憶との國にはひるやうな心持がした。

銀灰色の靄と、青い油のやうな川の水と、吐息のやうな覺束ない汽笛の音と、石炭船の鳶色の三角帆と――すべて止み難い哀愁をよび起こす是等の川の眺めは、如何に自分の幼い心を、其の岸に立つ楊柳の葉の如く、をの、かせたことであらう。

得る爲めに、自分は何よりも大川の水を愛するのである。

銀灰色の靄と、

青い油のやうな

川の水と、吐息の

やうな覺束ない

汽笛の音と、石炭

船の鳶色の三角帆と、――すべて止み難い哀愁を喚び起こす

是等の川の眺めは、如何に自分の幼い心を、其の岸に立つ楊

柳の葉の如く、をの、かせたことであらう。

此の三年間、自分は山の手の郊外に、雑木林のかげになつてゐる書齋で、靜平な讀書三昧に耽つてゐたが、それでも猶



芥川龍之介

讀書三昧に耽る。

長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由なつかしさに融かしてくれる。
純なる本來の感情に生きる。

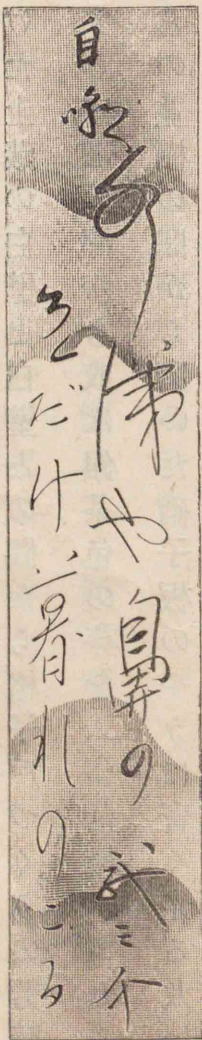
ほ、月に二三度はあの大川の水を眺めにゆくことを忘れなかつた。動くともなく動き、流るゝともなく流れる大川の水の色は、静寂な書齋の空氣が休みなく與へる刺戟と緊張とに、切ない程あわたゞしく動いてゐる自分の心をも、丁度長旅に出た巡禮が、漸く又故郷の土を踏んだ時のやうな、さびしい、自由なつかしさに、融かしてくれる。大川の水があつて、始めて自分は再び純なる本來の感情に生きることが出来るのである。

自分は幾度となく、青い水に臨んだアカシアが、初夏のやはらかな風に吹かれて、ほろ／＼と白い花を落すのを見た。自分は幾度となく、霧の多い十一月の夜に、暗い水の空を寒

夏川の水から生まれる黒蜻蛉の羽のやうなをのき易い少年の心。
驚異の眸を見はる。

自嘲
水滸や鼻の先だけ暮れのこる
龍之介

さうに鳴く千鳥の聲を聞いた。自分の見、自分の聞くすべてのものは、悉く大川に對する自分の愛を新たにす。丁度、夏川の水から生れる黒蜻蛉の羽のやうなをのき易い少年の心は、其の度ごとに新たな驚異の眸を見はらずには



龍之介之筆蹟

ゐられないのである。殊に夜網の船の舷に倚つて、音もなく流れる黒い川を凝視めながら、夜と水との中に漂ふ「死」の呼吸を感じた時、如何に自分は、たよりのない淋しさに迫られたことであらう。

硝子板のやうに青く光る大川の水。

あ、その水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日

此の大川の水に撫愛される沿岸の町々は、皆自分に取つて、忘れ難いなつかしい町である。吾妻橋から川下ならば、駒形、並木、藏前、代地、柳橋、或は多田の薬師前、うめ堀、横網の川岸——何處でもよい。是等の町々を通る人の耳には、日を受けた土藏の白壁と白壁との間から、格子戸づくりの薄暗い家と家との間から、或は銀茶色の芽をふいた柳とアカシアとの並樹の間から、磨いた硝子板のやうに青く光る大川の水は、其の冷やかな潮の匂と共に、昔ながら南へ流れる懐かしい響きを傳へてくれるだらう。あゝ、其の水の聲のなつかしさ、つぶやくやうに、拗ねるやうに、舌うつやうに、草の汁をしぼつた青い水は、日も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗

も夜も同じやうに、兩岸の石崖を洗つてゆく。

河竹黙阿彌 幕末明治の劇作家 本名吉村芳三郎 明治二十六年歿 年七十八

つてゆく。班女と云ひ、業平と云ふ、武藏野の昔は知らず、遠くは多くの江戸淨瑠璃作者、近くは河竹黙阿彌翁が、淺草寺の鐘の音と共に、其の殺し場の氣分を、最も力強く表はす爲めに、屢々其の世話物の中に用ゐたものは、實に此の大川のさびしい水の響きであつた。

殊に此の水の音を懐かしく聞く事の出来るのは、渡し船の中であらう。自分の記憶に誤りがないならば、吾妻橋から新大橋までの間に、元は五つの渡しがあつた。その中で、駒形の渡し、富士見の渡し、安宅の渡しの三つは、次第に一つづつ、何時となく廢れて、今ではただ一の橋から濱町へ渡る渡しと、御藏橋から須賀町へ渡る渡しとの二つが、昔のまゝ

に残つてゐる。自分が子供の時に比べれば、河の流れも變はり、蘆荻の茂つた所々の砂洲も跡方なく埋められてしまつたが、此の二つの渡しだけは、同じやうな底の淺い舟に、同じやうな老人の船頭をのせて、岸の柳の葉のやうに青い河の水を、今も變はりなく日に幾度か横ぎつてゐるのである。自分はよく、何の用もないのに、此の渡し船に乗つた。水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。殊に時刻が遅ければ遅い程、渡し船のさびしさとうれしさとが、しみじみと身にしみる。低い舷の外は直に綠色の滑かな水で、青銅のやうな鈍い光のある、幅の廣い川面は、遠い新大橋に遮られるまで、唯だ一目に見渡される。兩岸

水の動くのにつれて、搖籃のやうに軽く體をゆすられる心地よさ。

の家々は、もう黄昏の鼠色に統一されて、其の所々には障子にうつる灯の光さへ黄色く靄の中に浮かんでゐる。上げ潮につれて灰色の帆を半ば張つた傳馬船が、一艘、二艘と稀れに川を上つて來るが、何の船もひつそりと靜まつて、舵を執る人の有無さへもわからない。自分は何時にも此の靜かな船の帆と、青く平に流れる潮のほひとに對して、云ひやうのないさびしさを感ぜずにはゐられないのである。けれども、自分を魅するものは獨り大川の水の響きばかりではない。自分に取つては、此の川の水の光が殆んど何處にも見出だし難い、滑かさや暖かさを持つてゐるやうに思はれるのである。

船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れる水の色。

殆んど比喻を絶した、微妙な色調。

吾妻橋、厩橋、兩國橋の間、香油のやうな青い水が、大きな橋臺の花崗石と煉瓦とをひたしてゆくうれしさは云ふ迄もない。岸に近く、船宿の白い行燈をうつし、銀の葉裏を翻す柳をうつして、靜かに光りながら流れるのも、其の重々しい水の色に云ふ可からざる温情を藏してゐる。
殊に日暮に、川の上に立ちこめる水蒸氣と、次第に暗くなる夕空の薄明りとは、この大川の水をして、殆んど比喻を絶した、微妙な色調を帯ばしめる。自分はひとり、渡し船の舷に肘をついて、もう靄の下りかけた薄暮の川の水面を、何と云ふこともなく見渡しながら、其の暗綠色の水のあなた、暗い家々の立ち並んだ空に、大きな赤い月の出るのを見て、思

はず涙を流したのを、恐らく終世忘れることが出来ないうであらう。
(大川の水抄)

二二 渡歐の門出

島村抱月

島村抱月
文学者
名は瀧太郎
石見の人
大正七年歿
年四十八

嗽がんとて縁の戸一枚くれば、うれしくも晴れたる空に、星影はなやかなり。

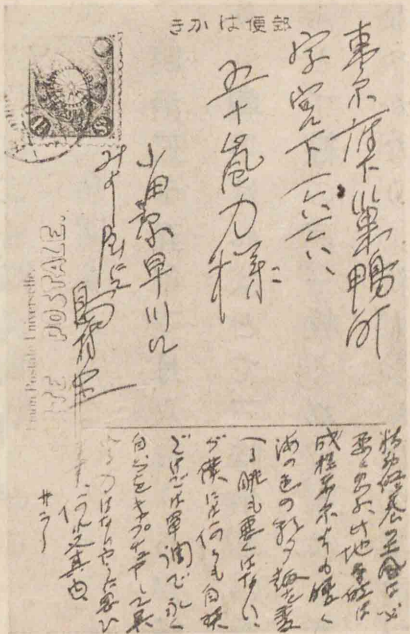
簇々たる白氣我れを包む。

神氣旺盛、まことに咳唾も詩を

明治三十五年三月八日。わが横濱を出て立つは今日なり。朝早ければとて、三時半といふに夜着より出づ。嗽がんとて、縁の戸一枚くれば、うれしくも晴れたる空に、星影はなやかなり。新しき水にて身内を拭ひなどすること例の如し。タウエルに含める冷水の體温と觸れて、簇々たる白氣我れを包むの際は、神氣旺盛、まことに咳唾も詩を成し、千

成し、千卷の經典も聲にしたがつて説くべしとおぼゆ。

卷の經典も聲に随つて説くべしとおぼゆ。八時五分前、新橋にて人々に別かる。今はなほ行くものの悲しき時にあ



島村抱月筆

らず。横濱にては汽船問屋に少憩して、十時本船に乗り込む。別かれを齎らせるの諸氏なほ三十人を剩して、小蒸氣の通ひ路

もいとにぎやかなり。

我が乗り込めるは早きかたなりき。後幾杯かの小蒸氣に、人の乗り込むたびく、我れは却りて甲板の上より人の

惜しき別かれもこゝに断つべし。留まるものは征衣の人、みな舷に倚りて臨む。

血に泣く別かれず。

別かれを見る身となれるも可笑し。いざ是れが最後の通ひ船なりと、人々を促したつる聲す。惜しき別かれもこゝに断つべし。留まるものは征衣の人、みな舷に倚りて臨む。あはれなる別かれの數々あるが中に、殊に人目を引きしは、頬ゆたかにして半白なれども、さして身分ありとは見えぬ老女の、十ばかりなる女兒の泣きくづれたるを、かい抱きて端艇にかへれる、乳母にやあらん、母はこなたの人にて、父なる外人の歸國するに、この兒、血に泣く別かれすといふなるべし。御身そも何の宿因ありて、斯かる際には生を享けし。長からん生ひさきも哀しいかな、涙多からずば止まざるの命運、そが血に肉に雕られたらずや。これを想へば、満船の

満船の別離多しといへども、未だこの薄命の一女兒より慘なるはあらざるなり。

別離多しといへども、未だこの薄命の一女兒より慘なるはあらざるなり。
既にして汽笛鳴り、山の如き船體は、一反ばかりも斜めにめぐりて、小蒸氣と別かれを惜むこなしさま／＼あり。打ちふるハンケチ、帽子の類、海風になびきて、漸く遠く、白く、小さく、消えもて行けば、あゝといひて、人々はじめて我れにかへれるが多し。この時正午を過ぐることに半。同乗の新しき友、さては事務の人々などと、名のりかはして懇意を頼むも、斯かる旅路はことさらに頼まるゝ心地するこそをかしかれ。

Cabin

夜は食堂にて二つ三つ雑談ののち、ケビンに歸りて、八時

Steam

半床に就く。スチームに暖を取りたれば、暑くして汗出づ。
〔滯歐文談〕

二三 歸朝

島崎 藤村

島崎藤村

詩人、小説家

名は春樹

信州の人

明治五年生

新嘉坡まで歸れば、もう日本に歸つたも同じやうなものだとは、熱田丸の船員からよく聞かされたことだ。私はあの新嘉坡の港で、既に日本の下駄の音を聞いて來たし、あれからの船の中で、日本の子供の泣聲も聞いて來た。それにあの港からは護謨園に従事する同胞の乗客とも一緒になつたから、暑い時の男や女の素足の風俗をも久し振で見て

來た。新嘉坡から香港、香港から上海と、國の方へ近づくとつれて、日本的な色彩を見つけることが多くなつて來た。しかしそれは斷片的にである。



島崎 藤村

神戸に着いた時は、實にすべが日本でないものはなかつた。熱田丸の入港を知つて、上陸者を迎へようとする人達が、吾儕の周圍に集まつて來た。

見知らずの人にさへ御辭儀の一つもして見たいと思ふほどの

私はそれらの同胞に眼をそゞぎ、それらの人達の間を歩いて見た。遠く旅して歸つて來た私が、どうかすると、見知らずの人にさへ御辭儀の一つもして見たいと思ふほどの

心地になつた。

心地になつたが、無理だらうか。七月初旬の日の光は私の行く先にあつた。其の日本らしい日あたりを眺めるにつけても、言ひあらはし難い強い歡喜が私の小さな胸に満ち來るのを覺えた。神戸の税關には、私は午前十一時頃迄居た。灰色なペンキ塗の木造の建築物がそれだ。夏の制服を着けた税關吏が、べた／＼と澤山貼紙のしてある旅の鞆の上に、例の白墨で検査済の印を書いてくれた。さしあたり吾儕のやうな上陸者に取つては、兩替店を探す必要があつた。英貨で持つて來た旅費の残りを日本の金に取替へる爲めに。ポンドやシリリングを圓や錢にする爲めに。吾儕の宿屋もさう遠くはなかつたし、町も見つたし、私は

Pound
Shilling

旅は私に巡禮者のやうな心持を與へた。

三人連で兩替かたぐ、清潔な街路の土を踏んで行つた。旅は私に巡禮者のやうな心持を與へた。疑ひもなく、これは廣い世界を遍歴して來た旅行者の誰れしもが經驗するものに相違ない。その心は、自分の國の町を見るにも、恰も外國の町を見るやうな感じを抱かせるのである。私は斯様な心持がいつまで自分に續くかを知らない。恐らく、五十五日間の海上で、眞黒に日に焼け、汐風に吹かれて來た私の皮膚も、色の褪める時があらうやうに、斯様な心持も次第に私から薄らいて行くのであらう。

一種異様な感覺が私の上に働き始めた。

とにかく一種異様な感覺が、神戸に上陸したその日から私の上に働き始めた。私は今が今この世に生れて來たか

のやうな新しさと鮮かさと初心らしさを以て、半生の間見慣れた故國の事々物々に對ふやうになつた。街路の多くが土であるのもめづらしい。歩道と車道との差別の少ないのもめづらしい。あそこの店頭に掲げてある紅や紫の旗は、こゝに出してある關西風の大きな提灯はと、そんな風に眼をとめて不思議に思ふやうになつた。その心持から言へば、下駄穿いて通る人を見るさへ不思議に思はれた。男や女の素足の風俗は既に新嘉坡あたりから見ても來たものだが、それでも珍しい。

どうかすると、私はまだ海に居るやうな氣がする。何處かの港へ上陸したに過ぎないやうな氣がする。自分の國

Cape Town
Durban
英領南アフリカ
のナタル州の港
市

ではないやうな氣がする。私の心は南亞弗利加のケープ
タウンへも行き、ダーバンへも行つた。あのマライ人や印
度人や支那人などの歐洲人と群居する新嘉坡あたりの町
へも行つた。時々私は自分の眼を疑つた。何故といふに、
自分の前を歩いて居る女が、それが實際日本の女ではなく
て、マライ半島あたりの土人の女ではないかといふやうな
氣を起こさせるのだから。

〔海へ〕

二四 鬼作左の嬉し泣き

新井白石

去にし天正十三年三月に、徳川殿御背中に疔うづきといふもの

新井白石
江戸の學者
家宣將軍侍講
名は君美
享保十年歿
年六十九

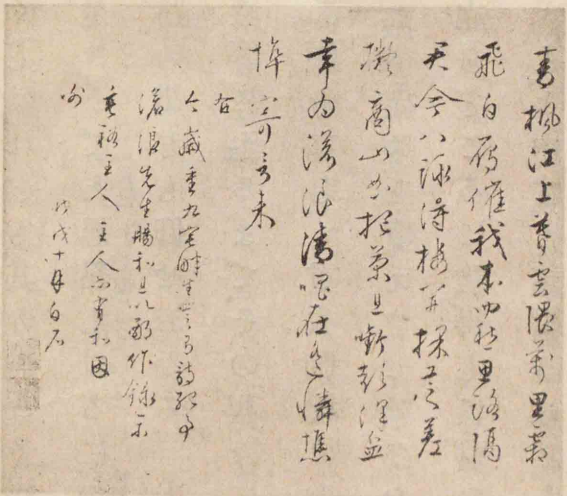
唯だ弱りに弱
る。

祈らぬ神佛もな
く、立てぬ願も
なし。

出來て、既に危く見えさせたまひしかば、内外の醫療術を盡
くしけれども、其の驗しるしなく、唯だ弱りに弱らせたまひ、自らも
是れまでと思召しけるにや、宗徒の御家人等召し集めて、御
跡の事ども仰せおかる。人々の周章いふに及ばず、士民百
姓等に至るまで、その程々に從ひて、祈らぬ神佛もなく、立て
ぬ願もなし。重次御枕に取りつきて泣くく、申しけるは、
「殿も定めて覺えさせ給ひなん、重次が昔此の病を受けしに、
立ちどころに驗得し良醫の候、彼れを召して見せ試み給ふ
べし。」と申す。「諸醫既に手を束ね、家康また死を決す、此の上
醫療其の詮なし、且つは命惜しむに似たり。」とて、用ゐ給はず。
重次大きに怒つて、「かほど大事の腫物、かるく、しく思召し

御心がらとは云
ひながら、あつ
たらしき命か
な。

悔つて、事急なるに臨めばこそ、諸醫も術盡きぬれ。夫れに
また良醫して治しまるらせんとするをも用ゐ給はず。失



川殿大きに驚かせたまひ、「あれ止めよ」と仰せければ近く侍

せ給はん事御心がらとはいひながら、あつたらしき命かな。諸醫術盡きぬと申す上
石は、彼等いかでか治しまるら
筆すべき。年老いたる重次が、
蹟御跡にさがつて、御供叶ふべ
からず。さらば御先へ参ら
ん」とて、御前を罷り立つ。徳

らふ人々走り出て引きとどめ、「仰せらるべき旨あらせられ
候」といふ。重次大きに聲を怒らして、「最期の暇乞うて罷り



本多重次

申す者を見苦しい殿原の止めや
うや」と罵つて出でんとす。「され
ば候、其の人を止めよとの御使が、
えこそ止めね」と申せとは、おとな
しくも候はぬ本多殿」と云はれ、「げ

には、さも候」とて、御前にまゐる。徳川殿「汝は物に狂ひてか
くはいふか。家康未だ死してはてぬに、たとひ家康が命終は
るとも、汝等が世にあらんを頼みにこそ死すべけれ。又汝
等も如何にもして一日も世に残りて、若き者ども掟して、我

詮なき死の供せんとする事やある。

犬死せん人の御供其の詮なし。

負はぬ手も候はず。

が家の絶えざらん様を計らんとは思はずして、詮なき死の供せんとする事やある。」と仰せければ、「いやいや、それは人に依つての事に候。重次も今少し年だに若く候はんには、仰せ迄も候はず、犬死せん人の御供其の詮なし。重次若年の昔より、こゝかしこの軍に従つて、眼射られ、指落され、足切られて、負はぬ手も候はず。人のかたはといふ程のかたは、重次が身一つに集まつて、世に交はらん事、叶ふべき身ならず。殿の御情深ければこそ、當家にては人に恐れも慕はれも仕りつれ、殿のなくならせ給ひなば、他人までも候ふまじ、先づ御駕の北條殿、我が國々を取らんとし給はんに、若き人々が、行末久しう仕へんと頼み切つたる主に忽ちに別かれて、氣

亡ぼされん事踵をめぐらすべからず。

後指さる。

汝が云ふ所道理至極せり。

おくれしはかゝしき矢の一筋をも射出だす事かなふべからず。當家亡ぼされん事また踵をめぐらすべからず。重次夫れ迄ながらへて、あの年寄つたるかたは者は、徳川殿の譜代にて某（な）がしといはれし家人なるが、いかに惜しき命なれば、かく世には恥をさらすらんと、後指さるれん事、老の恥何事か之れに過ぎ候べき。此の頃迄も、武田の家人等、御當家に召されて、さらぬ人にも手を束ね、膝を屈めしを、世にも哀れに思ひしが、今は此の老人めが身の上になつて候と存ずれば、殿に後れ參らせんが悲しきばかりにも候はず、我が身の果ても淺ましさに、先づ御先に死する事にて候。」と申す。「汝が云ふ所道理至極せり。さらば醫療の事は汝が心に任

りいん

すべし。天命既に至りて、家康空しくならんとも、汝もまた家康が心に任せ、如何なる恥を見つべくとも、一日も生き残つて、後の事よきに計ふべしと存ずるや、いなや」と仰せければ、重次が申す旨に任せられんには、重次いかで又仰せを背き参らすべきと申す。さらば醫師召させよとて召さる。醫師やがて参つて、御灸治よろしかるべしと申せば、重次艾とつて据うる。御灸の痛み覚えさせ給はねば、艾を増し加ふる事多くして、後いさゝか痛ませ給ふよし仰せければ、御薬をつけて参らせ、御薬湯をも進め奉りしに、其の夜の半ばに、御腫物潰れて、膿水血夥しう流れ出でて、御惱み立ちどころに輕ませ給へば、重次は嬉し泣きに聲を限りに泣く。御

前伺候の人々も、感涙を共に流しけり。

〔藩翰譜〕

二五 楠公と諸葛武侯 その一

大町 桂 月

我が國にて忠臣といへば、何人も先づ指を楠木正成に屈し、支那にて忠臣といへば、何人も先づ指を諸葛孔明に屈す。而して我が國にては櫻井驛の子別れに泣かざる者なく、支那にては孔明の出師表を讀みて涙せざる者、忠臣に非ずとさへ言はれたり。如何なれば正成と孔明とが、かく忠義の代表者とは目せられたるか。吾等は其の理を詮索せざるべからず。先づ孔明より言はん、其の上書の中に曰はく、

大町桂月
明治大正の文章家
名は芳衛
高知の人
大正十四年歿
年五十九

楠木正成
贈正一位
河内の人
延元元年湊川に討死す
年四十三

諸葛孔明
名は亮
瑯琊の人
蜀昭烈帝の臣
建興十二年歿
(西曆二三四四年)
年五十四

我が國にては櫻井驛の子別れに泣かざる者なく、支那にては孔明の出師表を讀みて涙せざる者、忠臣に非ずとさへ言はれたり。

内に餘帛あり外に贏財ありて、陛下に負くことあらじ。



諸葛孔明

と。孔明はかく口に言へるのみならず、死したる時果たして其の言の外に贏財ありて、陛下に負くことあらじ。

如くなりきといふ。彼れは衣食の爲めに仕へたるものに非ざりしなり。前出師表の中に曰はく、臣本布衣、躬耕於南陽、苟全性命於亂世、不求聞達於諸侯。

感激して遂に先帝に許すに驅馳を以てす。

先帝不以臣卑鄙、猥自枉屈、三顧臣於草廬之中、諮臣以當世之事。由是感激、遂許先帝以驅馳。

又曰はく、

先帝知臣謹慎、故臨崩寄臣以大事也。受命以來、夙夜憂慮、恐付託不効、以傷先帝之明。故五月渡瀘、深入不毛。今南方已定、甲兵已足。當帥將三軍、北定中原。庶竭驛鈍、攘除姦凶、以興復漢室、還於舊都。此臣之所以以報先帝而忠陛下之職分也。

後出師表中に曰はく

臣鞠躬盡力、死而後已。至成敗利鈍、非臣之明所能逆觀也。孔明の一生はほゞ以上の言に盡きたり。孔明は管に

孔明の忠義に至りては、實に純の純なるものにして、鷄群の一鶴の如く、燦として支那史上に輝けり。

管仲

周代の政事家
齊の桓公をして
天下に覇を唱へしむ。

樂毅

周代の戦術家
燕の昭王に仕へ
齊の七十餘城を
降し、昌國侯に
封ぜらる。

衣食の爲めに事へざりしのみならず、劉備の知遇に感じて智を盡くし、勇を盡くし、而して全く己れを離れ、生死を度外に付して君に奉じたり。古來英雄豪傑は多けれども、己れを離れ得るものは稀なり。忠義の士と雖も、其の行爲の中に多くは名利の混ざるを免れず。孔明の忠義に至りては、實に純の純なるものにして、鷄群の一鶴の如く、燦として支那史上に輝けり。

後漢の末、群雄蜂起して天下擾亂を極むるに方り、孔明は英資を抱いて、自ら管仲、樂毅に比しながら、南陽に高臥して起たず。人之れを臥龍と稱す。劉備は漢室の裔にして、絶代の大人物なり。彼れは關羽、張飛の如き豪傑を従へて雄

漢室傾頹し、姦臣命を竊み、主上蒙塵す。

董卓

後漢靈帝の臣
帝の歿後幼帝子
辯を廢して弘農
王をたて、後之
れを弑す。

曹操

三國時代魏の太
祖武帝

袁紹

後漢の大將軍
曹操と戦つて敗
る。

飛を試みたれども、失敗に失敗を重ね、後孔明の賢を聞いて、之れを訪ふこと三たび、而して三たびにしてやうやく孔明に會ふ。劉備人を屏けて孔明に謂つて曰はく、「今や漢室傾頹し、姦臣命を竊み、主上蒙塵す。孤、徳を度り力を量らずして、大義を天下に信べんと欲す。しかも智術淺短終に踧蹙して今日に至れり。然れども志猶ほ未だ已まらず。君謂ふに、計まさに安くにか出でんとする」と。

孔明答へて曰はく、「董卓より以來、豪傑並び起こり、州に跨り郡を連ぬる者數ふるに勝へず。曹操は袁紹に比すれば、則ち名微にして衆寡し。然れども操遂に能く紹に克ち、弱を以て強となせるは、惟れ天のみに非ず、抑もまた人の謀な

高祖 漢の高祖
劉邦
劉璋 後漢最後の王族
張魯 後漢に仕へ漢中
太守となる、曹
操に降り征南大
將軍となり、關
中侯に封ぜらる

り。今操己に百萬の衆を擁し、天子を挾んで以て諸侯に令す。是れ誠に與に鋒を争ふべからず。孫權は江東に據り歴有して、己に三世を歴たり。國險にして民附き、賢能之れが用を爲す。是れ以て援と爲すべくして、圖るべからざるなり。荊州は北、漢沔に據り、利、南海を盡くし、東、吳會に連り、西、巴蜀に通ず。是れ武を用ゐるの國なり。しかも其の主守ること能はず。是れ殆んど天の將軍を資くる所以なり。將軍まことに意あらんか。益州は險塞、沃野千里、天府の土なり。高祖之れに因りて以て帝業を成せり。劉璋は闇弱、張魯北に在り、民殷んに國富む、しかも存恤を知らず。智能の士、明君を得んことを思ふ。將軍は既に帝室の胄、信義四

關羽 劉備の武將
前將軍に拜せら
る
張飛 劉備の武將
車騎將軍

海に著はる。英雄を總攬して賢を思ふこと渴するが如し。若し荆益を跨有し、其の巖阻を保ち、西、諸戎を和らげ、南、夷越を撫で、外、好みを孫權に結び、内、政理を修め、天下變ある時、一上將に命じ、荊州の軍を將ゐて宛洛に向ひ、將軍親ら益州の衆を率ゐて秦川に出でなば、百姓孰れか敢て箠食壺漿して將軍を迎へざらん。誠にかくの如くんば、霸業成すべく、漢室興すべし」と。天下三分の計、既にこの時に定まれり。是れより孔明と情好日に密なり。關羽、張飛等悦ばず。劉備解して曰はく、「孤の孔明に於けるは猶ほ魚の水に於けるが如し。願はくは諸君また言ふこと勿れ」と。羽、飛等如何ともすること能はざりき。

二六 楠公と諸葛武侯 その二

大町 桂 月

元弘
元弘元年八月北
條高時討伐の御
謀洩れて、天皇
笠置に幸し給
ふ。高時光嚴院
を擁立す。

正成の起ちしさまも、ほゞ孔明と似たり。元弘の事は、後醍醐天皇の英斷と氣骨ある公卿の決心とに由りて擧げられたり。されど戰の事は武士の手に待たざるべからず。而して天皇笠置山にたてこもり給ふに及びても、武士の力なほ甚だ微弱なりき。乃ち藤原藤房を遣はして正成を召し給ふ。正成蹶然として起ち、藤房に従ひて笠置山に詣る。天皇藤房をして言はしめて宣はく、「賊を討つ事、朕一に以て汝に託す」と。座を命じて謀を問はせ給ふ。正成感激し

て答へて曰はく、「天誅時に乗ずれば、何の賊か斃れざらん。東夷は勇あれども智なし。若し勇を較ぶれば、六十州の兵を擧ぐとも、以て武藏相模に當たるに足らず。然りと雖も智を較ぶれば、臣に策あり。但し勝敗は兵の常なり、小挫折を以て其の志を變ずべからず。陛下苟も正成未だ死せずと聞かさば、また宸慮を勞し給ふことなかれ」と。正成は河内の一豪族に過ぎず、而して後醍醐天皇の知遇に感ずるや、全く一身一家を忘れ、蹶起して天下を引き受け、臣にして未だ死せざらば、また宸慮を勞し給ふことなかれといふ。何ぞ其の心情の忠純にして、其の意氣の雄偉なるや。正成は拜辭して、歸りて、直ちに赤坂城を築きて之れに據

れり。東國の兵大舉して來り攻む。正成奇策を以て屢賊を破りたれども、如何せん兵少なく城堅からず。赤坂城は終に陥りたり。笠置城も亦ついで陥りて、天皇は隱岐に流



楠木正成木像

され給へり。かくて元弘の擧は一時失敗に歸したれども、正成は未だ死せざるなり。彼れは再び起り。起つて金剛山に據れり。賊百萬の大軍を以て之れを攻むれども、抜くこと能はず。さるほどに天下風を望んで起ち、北條氏終に亡びて、建武中興の業成れり。嗚呼、

金剛山は高し。されど正成の忠節は更に一層の高きを覺ゆるなり。

孔明は豫期の如く孫權に結びて曹操を破り、蜀を平げて之れに據れり。而して劉備は天下を三分し、其の一を有して天子の位に即き、孔明は其の丞相となれり。これにて天下三分の計は成りたるが、姦凶攘除、漢室興復の事業は遂に成らざりき。我が楠公は如何。

足利尊氏叛するに及び、天下また亂れぬ。新田義貞は脆くも敗れたるが、正成の力によりて尊氏を破れり。尊氏遂に九州に走る。正成追はんことを勸むれども、義貞従はず。さる程に尊氏再び大舉して攻め上れり。正成は叡山行幸

將星終に五丈原に墜ちたり。

司馬仲達
名は懿
魏の將軍
歴、孔明と戦ふ。
晋の初め高祖宣
皇帝と追尊せら
る。

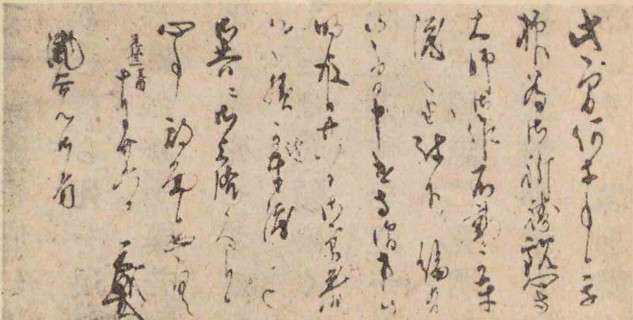
の策を上りたれども用ゐられず、乃ち勅命を奉じて出陣し、手兵七百を以て五十萬の大軍に當たり力戦奮闘、刀折れ矢盡きて終に湊川に討死したり。孔明も亦常に賊を滅ぼさんと念じたりき。而して一たび師を出だして利あらず、二たび師を出だしてまた利あらず、乃ち三たび四たび師を出だして、百敗屈せず、而して將星終に五丈原に墜ちたり。孔明は身長八尺もある偉丈夫なりき。然も其の軍中に在るや、食ふ所極めて少なし。敵の大將司馬仲達之れを聞きて、孔明の死すること遠からじと言ひけるが、孔明は果たして軍中に病死したり。病死とはいふものの、實は、身命を忘れ精力を使ひ過ぎたる結果にして、言はゞ職に斃れたるなり。

正成の死と大同小異といふべし。唯だ壯烈なる點に於いては、到底正成に比すべからず。正成は事の成らざるを知りて自ら死を決し、亡き後に子を留め、遺訓して王事に勤めしめたり。櫻井驛の訣別、萬古人をして袂を沾さしむ。いよく死せざるを得ざるに及び、彼れは弟の正季と相謂つて曰はく、「願はくは七たび人と生れて逆賊を亡ぼさん。」と。壯烈鬼神を泣かしむとは、實に正成の最期の謂ひなり。

三國志に孔明を評して曰はく、「孔明の相國たるや、百姓を撫し、儀軌を示し、官職を約し、權制に従ひ、誠心を開き、公道を布けり。忠を盡くして時に益する者は、讎と雖も必ず賞し、法を犯して怠慢なる者は、親と雖も必ず罰す。罪に服し、情

三國志
晋の陳壽の著せ
る魏吳蜀三國の
歴史
六十五卷

を輸す者は、重しと雖も必ず釋し、辭を遊ばし巧みを飾る者は、輕しと雖も必ず戮す。善は微なるをも賞せざるなく、惡は纖なるをも貶せざるなし。庶事精鍊、物其の末を理む。名に循ひ實を責め、虚偽齒せず。終に、邦域の内咸畏れて之れを愛す。刑政峻なれど怨むる者なし。心を用ゐること平らかにして、勸戒明らかなるを以て也。治を識るの良才、管仲、蕭何の亞匹也と謂ふべし。然れども連年衆を動かして未だ功を成すこと能はず。蓋し變に應ず



蕭何
前漢開國第一の
功臣と稱せられ、
相國となる。

楠 木 正 成 筆 蹟

るの將略は、其の長ずる所にあらざるか」と。孔明は中途に死して花々しき戦功は無かりしかど、思慮縝密にして、兵法に長じたり。此の點も大いに正成と似たり。されど用兵の術は到底正成に及ぶべくもあらず。殊に孔明は相將の事を全く一任せられたるが、正成は門地卑きを以て單に編帥に充てられたるに過ぎず。正成が其の器と地位と相應せず、善き謀も用ゐられずして、十分に其の力を伸ばすことを得ざりしは萬古の遺憾なりき。相國としては、孔明幾んど理想の域に達したり。これは正成に見るを得ざりし所なるが、されど、若し正成を用ゐたらば、いかばかり立派なる相國となりたるか、知るべからず。孔明は十分に用ゐられ

たれども、相として又將として、あれだけの事を成したるに過ぎず。正成は十分に其の力を伸ばすに由なかりしかども、而もなほあれだけの偉勳を立てたり。正成は徹頭徹尾公に奉じて心中少しも私念なし。人よりは神に近きものと謂ふべし。孔明にも私念なし。純忠の點に於いて、二人は誠に和漢の兩大關と稱すべし。然れども將略に於いては、われ正成を推す。而して感化の偉大なる點に於いても、孔明終に正成の比にあらざるなり。

室鳩巢嘗て正成と孔明とを比較して「孔明は劉備の三顧を待ちて起ちたれども、正成は召に應じて直ちに起ちたり。功名に急なるを免れず」と説きたりしが、これは鳩巢にも似

昭和四年八月十七日發行
 昭和四年六月六日發行
 昭和四年五月九日發行
 昭和七年十二月十四日發行
 昭和七年十月十八日發行
 昭和八年二月十七日發行

(新制版)

純正國語讀本 卷四

定價金 六十錢



編纂者 五十嵐 力
 發行者 東京市澁橋區戸塚町一丁目五十八番地 早稻田大學出版部
 代表者 山田 謙吉
 印刷者 東京市牛込區櫻町七番地 五十嵐 良晃

◆發行所

東京・早稻田

早稻田大學出版部

電話牛込三四五番・三四六番

